

**中部大学
創発学術院年報
第 2 卷(2017 年度)**



**ANNUAL REPORTS OF
THE CHUBU UNIVERSITY
ACADEMY OF EMERGING SCIENCES**

年報 Vol. 2 目次

| | |
|----------------------------------|----|
| I. 卷頭言（院長 飯吉厚夫） | 1 |
| II. 概要 | |
| 1. 施設配置図 | 3 |
| 2. 組織 | 5 |
| (1) 組織図 | |
| (2) 職員の内訳 | |
| (3) 職員一覧 | |
| 3. 予算概況（研究費） | 8 |
| 4. 人事異動 | 9 |
| 5. 海外渡航 | 9 |
| 6. 学術交流協定 | 10 |
| 7. 年間スケジュール | 10 |
| III. 個人の研究教育活動 | |
| 1. 研究概要 | 11 |
| (1) 松沢 哲郎（運営委員長・特別招聘教授・コーディネーター） | |
| (2) 森 重文（特別招聘教授・コーディネーター） | |
| (3) 辻本 雅史（兼務教員） | |
| (4) 山本 尚（兼務教員） | |
| (5) 安藤 隆穂（兼務教員） | |
| (6) 福井 弘道（兼務教員） | |
| (7) 松林 公藏（客員教授） | |
| (8) 長谷川 壽一（客員教授） | |
| (9) 矢野 誠（客員教授） | |
| (10) 土井 隆雄（客員教授） | |
| (11) 幸島 司郎（客員教授） | |
| (12) 山口 佳三（客員教授） | |
| (13) 津田 一郎（専任教員） | |
| (14) 牛田 一成（専任教員） | |
| (15) 荒井 迅（専任教員） | |
| (16) 松田 一希（専任教員） | |
| (17) 桑畑 裕子（専任教員） | |
| 2. 大型プロジェクト | 17 |
| 3. 研究業績 | 19 |
| (1) 書籍 | |
| (2) 学術論文 | |
| (3) 学会発表・招待講演 | |
| (4) 新聞記事・報道など | |

| | |
|-----------------------------------|----|
| IV. 創発学術院の研究教育活動 | |
| 1. 創発セミナー..... | 39 |
| 2. 学術レクチャー..... | 42 |
| 3. 学長コロキウム..... | 43 |
| V. 社会貢献 | |
| 1. 創発シンポジウム..... | 45 |
| (1) 創発学術院開所1周年記念シンポジウム | |
| (2) 第20回JST数学キャラバン 拡がりゆく数学 in 春日井 | |
| 2. 雑誌モンキーの刊行..... | 47 |
| VI. 中部大学創発学術院規程 | 53 |



I . 卷頭言

2017年度の中部大学創発学術院（英文名：Chubu University Academy of Emerging Sciences、英文略称：CUAES）の年報をお届けします。年報は、当該年度の教育と研究ならびに社会貢献の活動を記したものであり、自己点検報告書としての位置づけをしています。なお既刊の年報については、創発学術院のホームページにて公開しています（<http://www.cuaes.jp/>）。

大学という学びの場では、優れた研究こそが最良の教育だといえます。中部大学は、新たに学術の創発を掲げた学内外に開かれた高度な研究の場として、

「創発学術院」を2016年4月1日に創設しました。「卓越した研究者を学内外から集めて、既存の領域を超えた、新しい学問の開拓と発信を中部大学からしていきたい」という趣旨です。2015年3月に山極壽一京都大学総長と懇談し、中部大学と京都大学の国立私立の枠を超えた新しい形の連携を模索した産物です。京都大学は高等研究院を中部大学は創発学術院を、いずれも総長特区として同時に発足させ、正式な連携協定書を取り交わしました。松沢哲郎・森重文の京都大学特別教授を、同時に中部大学特別招聘教授としてお迎えしました。

「創発」とは、物理学や生物学などで使われる用語であり、部分の性質の単純な総和にとどまらない特性が、全体として現れるという意味で使われます。自律的な要素が集積し組織化することで、個々のふるまいを凌駕する高度で複雑な秩序やシステムが生じる現象、あるいは状態だともいえます。自律的な要素を、「個々の研究者」とし、高度で複雑な秩序やシステムを、「新しい学術分野」と読み替えてください。中部大学は創発学術院を拠点として、新たな学術の創発を目指し、卓越した研究者を学内外から集め、既存の学問領域を超えた新しい学問の開拓と発信をしていきます。

本年度は創設2年目にあたります。津田一郎教授、牛田一成教授、荒井迅教授の専任教員3名が新たに赴任し、松田一希准教授と桑畠裕子特命助教を加えて専任教員は合計5名になりました。さらに研究員4名と事務員1名も増員しました。また、山口佳三、北海道大学名誉教授を新たに客員教授として学外から招聘しています。

人材強化に加え、遺伝子実験などを実施することが可能な実験室を立ち上げました。16号館の最上階です。これにより、フィールド研究から、実験、実証研究、数学的な理論研究にわたる幅広い分野の先端的な萌芽研究を総合的に推進するための基盤が整いました。

創発学術院の津田一郎教授を代表とする研究課題（脳領域／個体／集団間のインタラクション創発原理の解明と適用）が、科学技術振興機構のCREST領域で新規採択されました。創発学術院のかかげる目標の一つである、分野横断型の新たな学術の創発を推進するための第一歩となるような、大型研究プロジェクトです。採択率6.8%という難関を突破したのは、私立大学のなかでは中部大

学だけでした。また10月1日に赴任した牛田教授は、環境省の環境研究総合推進費・地球自然共生領域「ニホンライチョウ保護増殖に資する腸内細菌の研究」の代表を務めています。

創発学術院の発足と同時に開始した「創発セミナー」、「学術レクチャー」、「創発シンポジウム」を継続しています。異なる分野を専攻する学生、研究者間の意見交換の場として学内においても定着してきました。さらに本年度からは、中部大学の学内運営に関する講演会を、第4の催し物として「学長コロキウム」と名付けて開催しています。学長のリーダーシップを実現する場の一つとして創発学術院が後押しするものです。第1回の学長コロキウムでは、長田義仁先生を講師としてお招きし、中部大学として国の大型研究費を申請していくために必要となる、国際連携および先端萌芽のための高度な研究組織や「大学力」を増強するための指針が議論されました。これを契機として、大型研究を組織するタスクフォースが整備され、中部大学を研究大学として脱皮させていく新たな原動力となっています。

中部大学の良き伝統を受け継ぎ、不言実行の精神のもと、新しい学問の開拓と発信をしていきたいと思います。皆様のご支援をお願いするとともに、創発学術院の活動を今後とも温かく見守っていただきますよう、なにとぞよろしくお願ひいたします。

院長 飯吉 厚夫



II. 概要

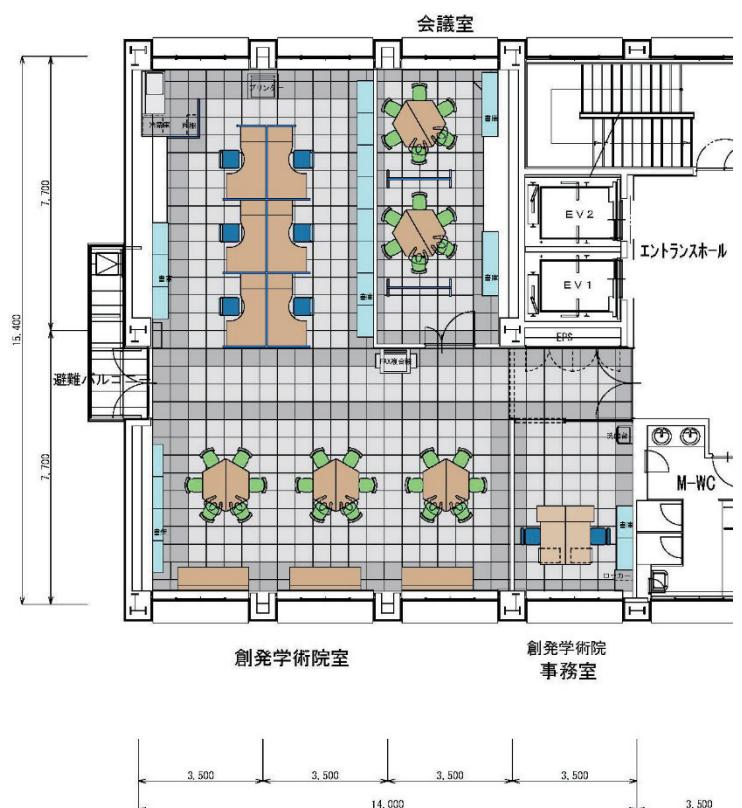
1. 施設配置図

所在地：愛知県春日井市松本町 1200 番地 16号館 10階

(16号館外観)



(キャンパス内地図)



(創発学術院の部屋配置図)



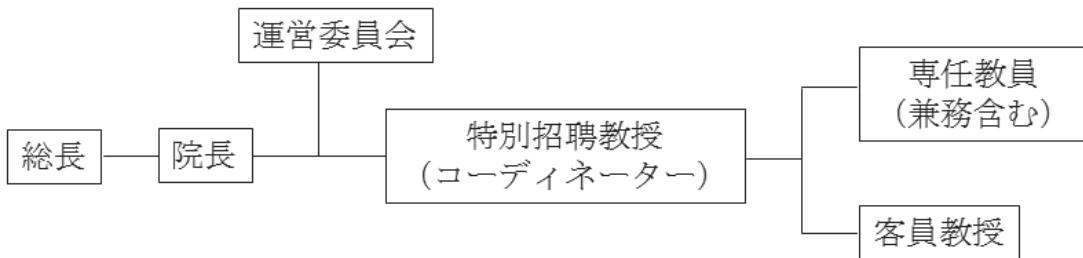
(創発学術院オフィススペース)



(創発学術院フリースペース)

2. 組織

(1) 組織図 (2018年3月31日現在)



院長

飯吉 厚夫 (学校法人中部大学理事長、中部大学総長)

運営委員 (順不同)

松沢 哲郎 (運営委員長、京都大学高等研究院特別教授、中部大学創発学術院特別招聘教授)

森 重文 (京都大学高等研究院長特別教授、中部大学創発学術院特別招聘教授)

石原 修 (中部大学学長)

辻本 雅史 (中部大学副学長)

山本 尚 (中部大学総合工学研究所長、分子性触媒研究センター長教授)

安藤 隆穂 (中部高等学術研究所教授)

福井 弘道 (中部高等学術研究所長、GISセンター長教授)

山口 佳三 (北海道大学名誉教授、中部大学客員教授)

松林 公蔵 (京都大学東南アジア研究所名誉教授、中部大学客員教授)

長谷川 壽一 (東京大学大学院総合文化研究科教授、中部大学客員教授)

矢野 誠 (京都大学経済研究所教授、中部大学客員教授)

土井 隆雄 (京都大学宇宙総合研究ユニット特定教授、中部大学客員教授)

幸島 司郎 (京都大学野生動物研究センター教授、中部大学客員教授)

津田 一郎 (中部大学創発学術院)

牛田 一成 (中部大学創発学術院教授)

荒井 迅 (中部大学創発学術院教授)

小谷 高秋 (学校法人中部大学管財部長)

伊佐治 公浩 (学校法人中部大学総務部次長、理事長室次長)

松田 一希 (中部大学創発学術院准教授)

桑畑 裕子 (中部大学創発学術院特命助教)

(2) 職員の内訳 (2018年3月1日現在)

| 教授 | 准教授 | 特命助教 | 特別招聘教授 | 客員教授 | 兼務教員 | 研究員 | 事務員 | 合計 |
|----|-----|------|--------|------|------|-----|-----|----|
| 3 | 1 | 1 | 2 | 6 | 6 | 4 | 1 | 23 |

(3) 職員一覧 (2018年3月1日現在)

専任教員

| | |
|-------|------|
| 津田 一郎 | 教授 |
| 牛田 一成 | 教授 |
| 荒井 迅 | 教授 |
| 松田 一希 | 准教授 |
| 桑畑 裕子 | 特命助教 |

兼務教員

| | |
|-------|------------------------------|
| 飯吉 厚夫 | 理事長、総長、院長 |
| 石原 修 | 中部大学学長 |
| 辻本 雅史 | 中部大学副学長 |
| 山本 尚 | 中部大学総合工学研究所長、分子性触媒研究センター長 教授 |
| 安藤 隆穂 | 中部高等学術研究所 教授 |
| 福井 弘道 | 中部高等学術研究所長、GIS センター長 教授 |

研究員

| | |
|--------------------------|--------------------|
| 渡部 大志 | 期限付研究嘱託（科研費・新学術領域） |
| Xiomara Carretero Pinzon | 日本学術振興会外国人特別研究員 |
| 平栗 明実 | 期限付研究嘱託（JST CREST） |
| 芝池 由枝 | 期限付研究嘱託（JST CREST） |

事務員

| | |
|--------|---------|
| 井上 加帆里 | 契約事務補助員 |
|--------|---------|

学外教員

| | |
|--------|------------------|
| 松沢 哲郎 | 特別招聘教授（コーディネーター） |
| 森 重文 | 特別招聘教授（コーディネーター） |
| 松林 公蔵 | 客員教授 |
| 山口 佳三 | 客員教授 |
| 長谷川 壽一 | 客員教授 |
| 矢野 誠 | 客員教授 |
| 土井 隆雄 | 客員教授 |
| 幸島 司郎 | 客員教授 |

3. 予算概況（研究費）

2017年度(平成29年度)文部科学省・日本学術振興会科学研究費助成事業等 内訳一覧（専任教員分のみ）

| 研究種別 | 研究代表者 | 金額 | 研究課題 |
|----------------------------|-------|------------|---|
| 戦略的創造研究推進事業（チーム型研究（CREST)) | 津田一郎 | 6,500,000 | 脳領域／個体／集団間のインタラクション創発原理の解明と適用（インタラクション創発原理の開拓と機能分化への適用） |
| 新学術領域研究 | 津田一郎 | 13,000,000 | ネットワーク自己再組織化の数理的基盤の創成 |
| 基盤研究(B) | 津田一郎 | 4,680,000 | 複合型視覚性幻覚の神経情報機構に関する数理モデル |
| 基盤研究(A) | 牛田一成 | 9,100,000 | 熱帯アフリカにおける畜産由来薬剤耐性菌発生の実態把握と対策の提案 |
| 研究分担 (基盤B) | 牛田一成 | 700,000 | ガーナ在来生物の家畜化に向けた飼育環境の整備 |
| 環境省環境研究総合推進費 | 牛田一成 | 12,830,000 | ニホンライチョウ保護増殖に資する腸内細菌の研究 |
| 基盤研究(C) | 荒井迅 | 2,360,769 | エントロピー圧縮による力学系・流体力学の新しい解析手法の開発 |
| 戦略的創造研究推進事業（チーム型研究（CREST)) | 松田一希 | 12,220,000 | 脳領域／個体／集団間のインタラクション創発原理の解明と適用（靈長類を対象とした、個体・集団のインタラクション創発現象の観察と解析） |
| 若手研究 (A) | 松田一希 | 2,600,000 | 父系重層社会の解明：テングザル・雄グループの生活史 |
| 日比科学技術振興財団 | 松田一希 | 1,000,000 | 葉食性靈長類の食の改善：動物園を自然への窓に |

4. 人事異動

| 職名 | 氏名 | 年月日 | 内容 | 備考 |
|------|-------|-----------|----|------------------------|
| 教授 | 津田 一郎 | 2017/4/1 | 着任 | 北海道大学理学研究院・教授より |
| 教授 | 荒井 迅 | 2017/4/1 | 着任 | 北海道大学理学研究院・准教授より |
| 客員教授 | 牛田 一成 | 2017/6/1 | 着任 | 京都府立大学生命環境科学研究所・教授との兼任 |
| 客員教授 | 牛田 一成 | 2017/9/30 | 離任 | 専任教員への着任のため |
| 教授 | 牛田 一成 | 2017/10/1 | 着任 | 京都府立大学生命環境科学研究所・教授より |
| 客員教授 | 山口 佳三 | 2017/4/1 | 着任 | 北海道大学総長より |
| 客員教授 | 辻本 雅史 | 2017/7/31 | 離任 | 副学長への着任のため |
| 兼務教員 | 辻本 雅史 | 2017/8/1 | 兼務 | 中部大学副学長、国際センター長 |

5. 海外渡航（専任教員分のみ）

| 氏名 | 期間 | 目的国 | 目的 |
|-------|------------------|-------|--|
| 松田 一希 | 2017/6/18～6/29 | マレーシア | 野外調査・研究連絡 |
| 松田 一希 | 2017/10/15～10/18 | ジャカルタ | シンポジウムへの参加・講演 |
| 松田 一希 | 2017/11/8～11/24 | マレーシア | 野外調査・研究連絡 |
| 松田 一希 | 2018/2/4～2/21 | マレーシア | 野外調査・研究連絡 |
| 津田一郎 | 2017/4/24～4/28 | 中国 | Forum on Cognitive Neuroscience Frontierに参加 |
| 津田一郎 | 2017/7/31～8/7 | スペイン | International Conference on Cognitive Neurodynamicsに参加 |

| | | | |
|------|----------------------|----------------------|---|
| 荒井迅 | 2017/7/11～7/17 | スペイン | Foundation of Computational Mathematics に参加 |
| 牛田一成 | 2017/12/11-2018/1/13 | ガボン共和国 | 野生動物調査研究 |
| 牛田一成 | 2018/2/3-2/17 | ウガンダ共和国 およびガーナ共和国 | 野外調査・研究連絡 |

6. 学術交流協定

| 締結日 | 締結機関 |
|-----------|----------------------|
| 2017/5/10 | チューリッヒ大学獣医学部（スイス） |
| 2018/2/8 | マケレレ大学獣医畜産防疫学部（ウガンダ） |

7. 年間スケジュール

2017年

- 5月 10日 天文台開所記念講演会（創発学術院共催）
- 5月 15日 第7回運営委員会、第2回学術レクチャー
- 7月 1日 第20回JST数学キャラバン「拡がりゆく数学 in 春日井」
- 7月 26日 第8回運営委員会、第1回学長コロキウム
- 9月 21日 第9回運営委員会、第6回創発セミナー
- 11月 28日 第10回運営委員会、創発学術院開所一周年記念シンポジウム

2018年

- 1月 24日 第11回運営委員会、第7回創発セミナー
- 3月 7日 第12回運営委員会、第8回創発セミナー



III. 個人の教育研究活動

1. 研究概要

(1) 松沢 哲郎

チンパンジーとヒトを主な対象とした比較認知科学の研究をおこなった。コンピューター課題および対面課題による認知研究では、数系列の学習と記憶、色と文字の対応、物の操作を通じた行為の文法を研究した。野外研究としては、西アフリカ・ギニアのボッソウと東隣のニンバ山で野生チンパンジーの行動と生態を調査し、「緑の回廊」と呼ぶ森林再生研究も継続した。その他に、中国の雲南キンシコウと、ポルトガルのアルガ山の野生馬の野外研究を実施した。なお、新たな課題として、パラボリックフライトに搭乗して自らも被験者の一人となり、無重力下での認知課題の研究を開始した。

(2) 森 重文

代数幾何は、代数多様体という代数的な図形を研究する。代数多様体は爆発という操作で酷似した（双有理同値な）代数多様体を幾つでも作ることが出来る。双有理同値なものに共通した性質を研究するのが双有理幾何である。その中心的位置にある極小モデル理論は、与えられた代数多様体に基本的な変換を施し、極小モデルなどの出来るだけ簡単な代数多様体にして研究する。3次元では理論は完成しているが、4次元以上では完全には完成していない。森は2次元と同程度に3次元も理解できるように、その基本的な変換を具体的に分類する研究を行っている。2017年度はその中で IIA型と呼ばれる変換の分類と具体例の構成を前年度に續いて行い完了した。

(3) 辻本 雅史

「知の伝達メディア」という視点から、おもに日本近世の学問・学習の方法論を分析し、近世思想家における「知の作り方」を分析した。なかでも江戸期の出版という新たなメディアを活用して儒学知を識字民衆に知を伝達した貝原益軒と、「講釈」「心学道話」という口語話法（声）によって大衆に知を発信し教化活動を展開した石田梅岩とその後継の石門心学を比較検討した。他方、公益財団法人前川財団の子育てに関わる研究助成と公開シンポジウムの企画開催に協力した。

(4) 山本 尚

私たちは、人類の半世紀に渡るカルボン酸活性化法によるペプチド合成を一新し、世界で初めてルイス酸触媒法を導入、真に高効率な触媒的ペプチド合成を

達成した。ルイス酸法は、カルボン酸活性化法では解決できなかったラセミ化問題を解決し、同時に当量の反応剤を用いない触媒的ペプチド骨格合成によって、合成の革新的効率化を達成した。今後、金属触媒の配位子設計・最適化によって、反応収率の劇的向上、触媒固定化と反応回転数の飛躍的向上等を図る。さらにルイス酸法による一般的なライゲーション法を開発し、すべてのアミノ酸の組み合わせで適用可能なライゲーション法を開発し、従来の固相法で不可能なペプチドのパラレル合成法を確立する。

(5) 安藤 隆穂

本年度も科研費による研究「自由主義と自由の制度化とその相互作用」を中心に研究活動を行った。主に三つの分野で構成され、第一は、「ウエストファリア体制期以降の主権理論の発展と自由主義の成立との関係」について、第二は、「フランス革命期に前後する時期の独仏思想交流と自由主義の成立」について、第三は、「東アジア思想交流における自由と公共」についてが主題である。成果発表としては、公開研究会「ナポレオン帝政と公共圏」(広島市、2017年7月19日)、公開研究会「『思想としての〈共和国〉』を読む」(名古屋大学、2018年1月6日)などを開催した。近刊予定の『社会思想史事典』(丸善)の共同編集者として、「社会思想史の成立」、「フランス啓蒙思想」等の論文項目を執筆した。また、出版には至らなかったが、公共圏の思想史を主題とする、二冊の著書の執筆に全力を投入した。

(6) 福井 弘道

地域から地球の多様な空間スケールで持続可能性を追求するには、複数の学術領域をまたがる学際研究や社会の多様なステークホルダーとの連携・協働による超学際的なアプローチが不可欠である。デジタルアースは、サイバースペース上に構築される俯瞰型情報基盤、多次元・多解像度で表現された地球であり、持続可能な地球の将来を考えるために、環境・災害等の「問題複合体」を解題する共同実験室、コミュニケーションのプラットフォームとして利用が期待される。引き続きデジタルアースの構築とその活用について研究を行うとともに、創発学術の創成基盤を模索した。今年度は特にUN-ESCAPと連携してアジア・太平洋地域について、デジタルアースを活用した防災・減災に関連したSDGsの指標の可視化に関する研究、ならびに気候変動に関する適応策について、不確実性を考慮したリスクガバナンス研究に注力した。

(7) 松林 公蔵

約13年にわたって長期縦断研究をおこなっている高知県土佐町在住高齢者に関する健康長寿計画を継続した。内容としては、地域在住高齢者の生活習慣病の管理、Activities of Daily Living (ADL)、Quality of Life (QOL)の評価とともに、最近注目されている高齢者の Frailty 調査・解析を実施した。国外研究としては、ブータンの複数地域に若手研究者を派遣して、地域に即した高齢者ヘルスケア・デザインの構築を開発した。約18年間継続しているニューギニア（インドネシア・西パプア）に多発する神経難病に関する実態調査を実施して、時代とともに変化する病型の変遷を検討した。

(8) 長谷川 壽一

ヒトおよび動物（ニホンザル、ウマ、カラス）を対象にして以下の研究を行った。ヒトについては、1) 自閉症児と定型発達児を対象に、心の知覚と道徳性判断に関する実験研究。2) 幼児期における資源分配ゲームを用いた一般互恵性の発達に関する研究。3) 大学運動会部員を対象としたテストステロンが支配性に及ぼす影響の研究、動物については、4) ニホンザルにおける不公平状況下の社会行動に関する野外実験研究、5) ウマにおけるヒトの感情表出に対するクロスモーダルな認知の論文化、6) ニホンザル幼体の遊びに関する定量的解析、7) ハシブトガラスの性差の発達に関する定量的研究を行った。

(9) 矢野 誠

本年度も、本研究者が提唱する「市場の質」の経済学の構築に向けて、引き続き研究を進めてきた。その中で、特に、市場の質という概念の根幹をなす「公正性」と「効率性」の関係について研究を進めた。効率性というのは、規範的側面から市場の機能を示すために、20世紀の経済学を通じて精緻化された代表的概念である。市場の質理論では、第二の規範的尺度として、市場競争に関する競争上公正性が提唱されている。一般に、公正性というのは広く確立され、受け入れられたルールの順守の程度と定義できる。市場の質理論では、競争上公正性の基準として、どの市場参加者も自分と取引する可能性のある潜在的な取引相手を、経済的条件以外では、差別しないという無差別性原則が提唱されている。本年度の研究では、いかにして欧米の市場において無差別性原則が形成され、さらに、この原則の下で行われる公正な市場取引がどのようなものかについての解明に成功した。

(10) 土井 隆雄

人類が宇宙に持続的に展開していくための学問「有人宇宙学」の創出めざし、教育・研究活動を展開した。教育活動において、文部科学省委託事業「有人宇宙活動のための総合科学教育プログラムの開発と実践」を遂行し、有人宇宙活動のために基礎教育プログラムと専門教育プログラムを構築した。研究活動として、京都大学花山天文台において系外惑星観測システムを使い、系外惑星の探査・観測を行った。また、宇宙における新しい資源としての木材利用の可能性を探るため、宇宙木材利用研究会を主導し、真空中における木材の物理化学特性を調べる実験を開始した。さらに、京都大学靈長類研究所と高等教育研究開発推進センターと協力して、パラボリックフライトを利用した微小重力環境下での社会心理学的実験および時間認知実験を実施した。

(11) 幸島 司郎

イルカ、ゾウ、バク、ヤマアラシなど、様々な野生動物を対象として、その行動と生態、保全に関する研究をおこなった。行動学的研究としては、アジアゾウ、バクなどの音声バリエーションを明らかにし、行動との関係解析から各音声の機能を推定する研究や、これまで未解明だったミナミハンドウイルカの夜間の行動や環境利用を音声を手掛かりにして明らかにする研究をおこなった。生態学的研究としては、ボルネオ島の熱帯雨林に生息するヤマアラシ類の社会構造と繁殖生態に関する研究や、マレーバクの塩場利用に関する研究を行った。保全研究としては、絶滅危惧種であるアマゾンマナティーの野生復帰事業と野生復帰個体の行動研究を継続して実施した。加えて、氷河生態系の生物に関する研究も行った。

(12) 山口 佳三

総長時代、研究に振り向ける時間はなかったので、昨年は、研究のリハビリ期間であった。幸い、春先より早稲田大学理工学部数学教室の談話会に招いて頂いて以来、徐々に記憶を呼び覚ましながら、かつて気になっていた事柄を思い出しつつ研究生活に戻ってこれたようである。特に、秋には2度に渡ってポーランドの研究集会に参加する機会があり、またその間に集中して計算する機会が持てたので、現役時代ゆっくり時間が取れず、取り組めなかつた問題に手がついた。すなわち、すべての例外単純リー環に対して、それを自己接触同型として持つ二階過剰決定系の具体的な方程式を書き上げることができた。

(13) 津田 一郎

クレスト課題「脳領域/個体/集団間のインタラクション創発原理の解明と適用」が採択になったので、その立ち上げに関する研究を行った。拘束条件に応じて機能分化し、複雑にネットワーク化された環境に即時適応する原理として拘束条件付き自己組織化理論を採用し、定式化と適用具体例の研究を開始した。また、新学術領域「非線形発振現象を基盤としたヒューマンネイチャーの理解」の研究において大きな成果が上がった。てんかん患者の脳波データの数理解析からてんかん発作の前駆現象となりうる数学的構造として低次元のカオス力学系の存在を確定した。また、拘束条件のもとで負の自由エネルギーを最大にする変分問題をニューラルネットモデルで展開し、シナプス学習の規則を導き、ネットワーク学習後のシナプス結合切断からの自己再組織化の可能性を数理的に解析する系を構築した。

(14) 牛田 一成

野生動物と家畜の腸内細菌研究を行った。国内では、環境省環境総合研究推進費をうけて、ニホンライチョウの保護増殖事業に関わり、飼育ニホンライチョウの健全な発育と将来の野生復帰に向けた方法論の開発を進めた。国外では、ウガンダ共和国において、野生動物や家畜の薬剤耐性菌汚染を調査した（科研費基盤A代表）。将来的に無薬・減投薬の家畜生産を実現するために、健康なアフリカ現地種の家畜や、野生動物から有用細菌の分離と同定を実施するとともに、家畜由来の薬剤耐性菌の分離、農場周辺の薬剤耐性菌汚染を把握するために、土壤の耐性遺伝子メタ解析、畜産物を汚染する薬剤耐性菌の解析を行った。ガーナ共和国においては、アフリカ原産の野生動物の家畜化を進めるために、野生種から有用な乳酸菌を分離し、飼育下の動物に給与する研究を進めた（科研費基盤B分担）。

(15) 荒井 迅

高次元力学系の分岐理論について、位相力学系と複素力学系の双方の手法を絡めた研究を進めた。位相力学系的な手法としては、従来よりコンレイ指数を用いた研究を進めていたが、これを複素力学系に適用すると、複素力学系のある種の rigidity を活用することで従来の実力学系での議論よりも簡単に重要な結果が得られることがわかった。さらに、九州大学の石井豊氏との共同研究では、複素力学系の手法を用いて馬蹄形写像が壊れる瞬間の分岐をエノン写像という重要な力学系の場合に決定する仕事も行なった。また応用方面では、北海道大学の武次研究室との共同研究において、量子化学計算の結果をグラフ理論を活用して可視化し、ポテンシャル曲面の構造を効果的に表現する手法を開発した。

(16) 松田 一希

2005年より、マレーシアサバ州のスカウ村、アバイ村を拠点とした霊長類（特にテングザル）の長期観察プロジェクトを行っている。本プロジェクトでは、テングザルの社会生態、採食生態、行動生態の観点から研究を進めている。また、テングザルと同所的に生息している他の昼行性霊長類（オランウータン、テナガザル、カニクイザル、ブタオザル、シルバーラングール）や地上性哺乳類（ヒゲイノシシ、サンバー、マメジカなど）の基礎的な生態・社会の研究も同時に実施している。テングザルでみられる重層社会の内部構造を明らかにするプロジェクトにおいては、遺伝子解析から各個体間の血縁度の分析を開始した。また、国内外の動物園と連携し、糞分析を用いた飼育下テングザルの栄養状態を評価する指標を論文としてまとめた。テングザルの鼻サイズの性的二型の進化過程を探るためのプロジェクトについては特に大きな進展を遂げた。つまり、テングザルが形成する特殊な社会性が雄間競争の発端となり、雌の雄選択が加速することで特異な鼻へと進化した進化のシナリオを論文として提示した。

(17) 桑畠 裕子

創発学術院事務局を担当し、全般的な管理運営業務をおこなった。具体的には、創発学術院および各教員に措置された予算の管理と執行、運営委員会の運営、連絡調整に従事した。また、創発学術院が開催する学内セミナー（創発セミナー、学術レクチャー、学長コロキウム）や学内外に広く開かれたシンポジウム（第20回JST数学キャラバン「拓がりゆく数学 in 春日井」、創発学術院開所1周年記念式典「新しい学術の創発に向けて」）の企画、運営をおこなった。さらに、教育活動の一環として、霊長類の行動、認知に興味のある本学学生を対象に、京都大学霊長類研究所と日本モンキーセンターにおける研修を主催した。また、創発学術院に所属する専任教員の研究支援活動に幅広く従事し、科学研究費、JST・CREST研究等の申請、および研究遂行にかかる各種業務に取り組んだ。

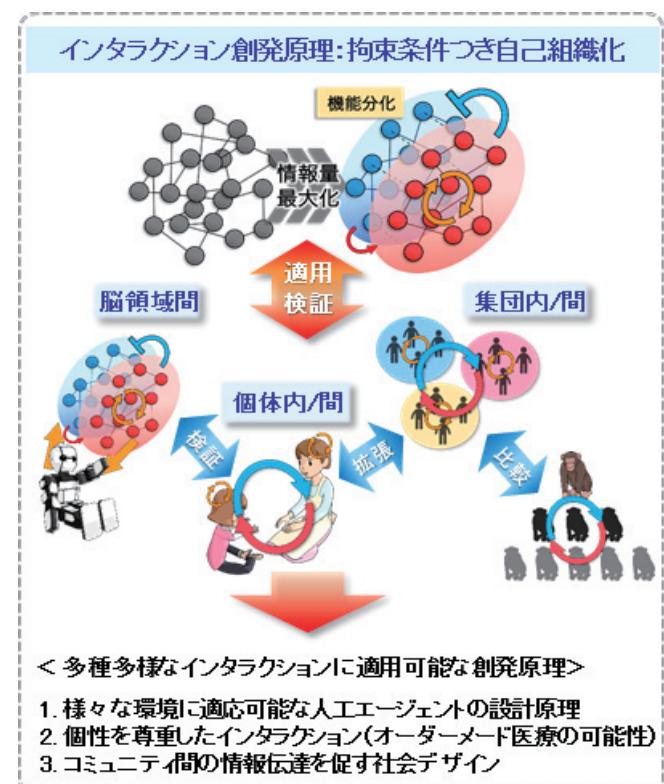
2. 大型プロジェクト

国立研究開発法人科学技術振興機構 CREST 「脳領域／個体／集団間のインタラクション創発原理の解明と適用」

複雑にネットワーク化された環境とインタラクションすることで機能分化し、環境に即時適応する人工システムの基本原理、設計原理を次の研究によって解明していきます。脳領域内、個体内、個体間、集団内、集団間それぞれにおいて、集合知とともに新しい機能を発現するインタラクションのあり方を親子、ヒト集団、靈長類集団にかかる拘束条件を変化させることで明らかにし、インタラクションの新たな科学を創出することが目的です。特に、下記の2点に着目して研究を推進しています。

- i) システムに拘束条件がかかることで機能的なシステム部品（成分）が自己組織される原理は何か？
- ii) 人間社会において個より機能の優れた集合知が可能か？

これに対して、平成29年度は準備的研究を行いつつかの成果があがりました。津田グループでは、インタラクション創発原理に関して、ラグランジュ未定乗数を独立変数と見て拘束多様体上での最適軌道の選択という形で定式化するバコノミック力学的な定式化と具体例を研究しました。拘束条件のもとで振動状態を定常状態に制御できるための初期値集合を具体的に得る方法を提案しました。負の自由エネルギー最大化原理をニューラルネットワークに適用し、一般的なシナップス学習則を導出し、これをネットワーク再組織化の条件決定に応用しました。松田グループでは、テングザルの拘束条件と機能分化について、鼻の大きさが群れのサイズを最適化しているデータを提示することで、群れの重層構造の決定因子の一つが明らかになり集合知の創発原理解明に弾みをつけました（文責：津田一郎）



環境省環境研究総合推進費

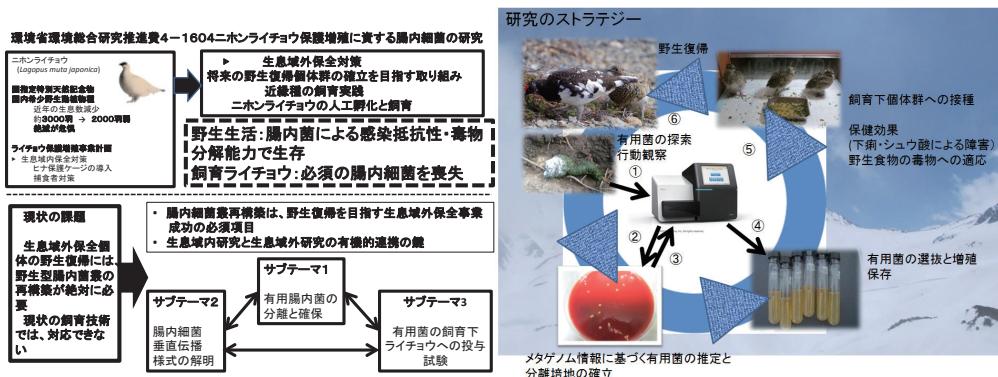
<4-1604> ニホンライチョウ保護増殖に資する腸内細菌の研究

(H28 -H30 年度)

特別天然記念物のニホンライチョウは、生息数が減少していることから絶滅が危惧されている。そのため、生息域内の保護と野外での採卵と動物園における人工孵化事業が進められている。しかし、採卵と人工孵化を除いて解決すべき課題が多く見つかっている。「人工飼育の成功」という喫緊の課題に加えて「飼育個体の野生復帰」という将来的な課題に対して、本研究では次の 2 点を解明することで解決の道筋をつけようとしています。

- i) ライチョウの生存を可能にする腸内細菌叢確立の解明
- ii) 感染抵抗性と有毒物質の解毒作用を持つ有用菌の確保と野生型腸内菌叢の再構築

これに対して、平成 29 年度は 28 年度に引き続き以下の成果があがりました。1) 野生ライチョウの母鳥から雛への腸内細菌伝播様式は、雛による母鳥盲腸糞の食糞行動による。雛の特異的食糞行動は発現する期間が定まっている(孵化後 3 日～18 日前後)。2) 南北アルプスおよび頸城山塊各地点の野生個体盲腸糞 120 検体から DNA を抽出して、16S rRNA 遺伝子メタ解析を行い、主要な菌種には地域差がないこと、ニホンライチョウに特異的な主要細菌は広義の乳酸菌 *Olsenella, Bifidobacterium Actinomyces* に乳酸資化性の *Megasphaera* であることを確定した。3) 飼育ニホンライチョウの腸内細菌のシュウ酸分解能を立山野生個体群と比較し、野生の方が高い分解能を示す。4) 野生ライチョウの食物である野生ガシコウランとガシコウラン栽培品種に含まれる二次代謝産物の比較を行い、野生のガシコウランにのみ安息香酸と細胞毒性のあるビベンジル化合物含まれることを明らかにした(投稿準備中)。5) 野生ニホンライチョウから分離した細菌のうち、飼育ニホンライチョウの死亡個体由来の日和見感染菌に対する抗菌性を示し、高いタンニン分解活性も示した *Lactobacillus apodemi* の凍結乾燥菌末を調整し、スバルバルライチョウ飼育実験の接種菌として提供し、乳酸菌投与の効果を確認できた。6) 粪便移植の際に問題となる寄生虫コクシジウム原虫の分類と病原性を引き続き検討し、新種アイメリア属の記載を行った。



3. 研究業績

(1) 書籍

- 松田一希 (2017) テングザル、ブタオラングール. 湯本貴和 全体監修, 世界で一番美しいサルの図鑑. X-Knowledge, pp. 80-84.
- 松田一希 (2018) ウシのような胃をもち、ヒトのような社会でくらすサル. 小林真、工藤岳 編. 生物学者、地球を行く. 文一総合出版, pp. 160-167.
- 松沢哲郎 (2017) 心の進化をさぐる—はじめての靈長類学. NHK シリーズ ころをよむ. NHK 出版.
- 辻本雅史 (2017) 鎮国と開国—近世日本の内と外—、劉序楓と共に編、国立台湾大学出版中心 (台灣台北市) pp.1-14.

(2) 学術論文

- Arai Z, Ishii Y (in press) On parameter loci of the Henon family. Communications in Mathematical Physics.
- Bryson-Morrison N, Tzanopoulos J, Matsuzawa T, Humle T (2017) Activity and Habitat Use of Chimpanzees (*Pan troglodytes verus*) in the Anthropogenic Landscape of Bossou, Guinea, West Africa. International Journal of Primatology 38(2):282–302.
- Chapman CA, Bortolamiol S, Matsuda I, Omeja PA, Paim FP, Reyna-Hurtado R, Sengupta R, Valenta K (2017) Primate population dynamics: variation in abundance over space and time. Biodiversity and Conservation 27: 1221-1238.
- Fitzgerald M, Coulson R, Lawing A, Matsuzawa T, Koops K (2018) Modeling habitat suitability for chimpanzees (*Pan troglodytes verus*) in the Greater Nimba Landscape, Guinea, West Africa. Primates doi.org/10.1007/s10329-018-0657-8.
- Gao J, Su Y, Tomonaga M, Matsuzawa T (2017) Learning the rules of the rock-paper-scissors game: chimpanzees versus children. Primates 59:7–17 doi.org/10.1007/s10329-017-0620-0.
- 原理史, 福井弘道, 岡本肇, 清本三郎 (2018) 「設定行動」と「日常行動」の試行による家庭の省エネ行動の動機づけ効果の分析, 環境共生学会, 環境共生 Vol.32, pp.41 -46.
- 長谷川寿一 (2017) 「社会のための心理学に向けての提言」心理学評論, 60(4).
- Haslam M, Hernandez-Aguilar RAdriana, Proffitt T, Arroyo A, Falótico T, Fragaszy D, Gumert M, K. JW. , Huffman MA. , Kalan AK. , Malaivijitnond S, Matsuzawa T, McGrew W, Ottoni EB. , Pascual-Garrido A, Piel A, Pruett J, Schuppli C, Stewart F, Tan A, Visalberghi E, Luncz LV (2017) Primate archaeology evolves. Nature Ecology & Evolution 1:1431–1437. doi:10.1038/s41559-017-0286-4.

- Hayashi M, Matsuzawa T (2017) Mother-infant interactions in captive and wild chimpanzees. *Infant Behavior and Development* 48, Part A: 20–29.
- Hirosaki M, Okumiya K, Wada T, Ishine M, Sakamoto R, Ishimoto Y, Kasahara Y, Kimura Y, Fukutomi E, Chen WL, Nakatsuka M, Fujisawa M, Otsuka K, Matsubayashi K (2017) Self-rated health is associated with subsequent functional decline among older adults in Japan, *Int Psychogeriatr*. (2017) Sep;29(9):1475-1483. doi: 10.1017/S1041610217000692. Epub 2017 May 31.
- Ikebuchi M, Okanoya K, Hasegawa T, Hans-Joachim Bischof (2017) Chick Development and Asynchronous Hatching in the Zebra Finch (*Taeniopygia guttata castanotis*), *Zoological Science*, 34(5):369-376.
- Inoue Y, Takahashi T, Burris R. P, Arai S, Hasegawa T, Yamagishi T, Kiyonari T (2017) Testosterone promotes either dominance or submissiveness in the Ultimatum Game depending on players' social rank. *Scientific reports* 7 Article number:5335 doi:10.1038/s41598-017-05603-7.
- Iwasaki M, Kimura Y, Sasiwongsaroj K, Kettratad-Pruksapong M, Suksudaj S, Ishimoto Y, Chang NY, Sakamoto R, Matsubayashi K, Songpaisan Y, Miyazaki H (2018) Association between objectively measured chewing ability and frailty: A cross-sectional study in central Thailand, *Geriatr Gerontol Int*. 2018 Jan 26. doi: 10.1111/ggi.13264.
- Limlahapun P, Fukui H (2017) SAR Imagery - Based Detection to Support Inundated Observation Using Web Technology. *Int. J. Social Science and Humanity* 7(7).472-477.
- 金杉洋, 松原剛, 柴崎亮介, 杉田暁, 福井弘道 (2017) 登山実態の把握へ向けた登山者行動計測手法の検討, *Theory and Applications of GIS*, Vol.25, No.2, pp.1-6.
- Koda H, Murai T, Tuuga A, Goossens B, Nathan S, Stark DJ, Ramirez DAR, Sha JCM, Osman I, Sipangkui R, Seino S, Matsuda I (2018) Nasalization by *Nasalis larvatus*: Larger noses audiovisually advertise conspecifics in proboscis monkeys. *Science advances* 4:eaaq0250. doi: 10.1126/sciadv.aaq0250.
- Limlahapun P, Fukui H (2017) SAR Imagery - Based Detection to Support Inundated Observation Using Web Technology. *Int. J. Social Science and Humanity* 7(7). 472-477.
- Martin CF, Biro D, Matsuzawa T (2017) Chimpanzees spontaneously take turns in a shared serial ordering task. *Scientific Reports* 7:14307.
- Matsubayashi M, Tsuchida S, Ushida K, Murata K. (2018) Surveillance of *Eimeria* species in wild Japanese rock ptarmigans, *Lagopus muta japonica*, and insight into

parasitic seasonal life cycle at timberline regions of the Japanese Alps. IJP: Parasites and Wildlife 7: 134-140.

Matsuda I, Chapman CA, Shi Physilia CY, Mun Sha JC, Clauss M (2017) Primate Resting Postures: Constraints by Foregut Fermentation? Physiological and Biochemical Zoology 90: 383-391.

Matsuda I, Bernard H, Tuuga A, Nathan SKSS, Sha JCM, Osman I, Sipangkui R, Seino S, Asano S, Wong A, Kreuzer M, Ramirez Saldivar DA, Clauss M (2018) Fecal Nutrients Suggest Diets of Higher Fiber Levels in Free-Ranging than in Captive Proboscis Monkeys (*Nasalis larvatus*). Frontiers in Veterinary Science 4.

Matsukawa A, Ahmad A. H, Kohshima S (in press) Social structure and reproduction of long-tailed porcupine (*Trichys fasciculata*), *Mammalia*.

Matsuzawa T (2018) Chimpanzee Velu: the wild chimpanzee who passed away at the estimated age of 58. Primates doi.org/10.1007/s10329-018-0654-y.

Matsuzawa T (2018) Parabolic flight: experiencing zero gravity to envisage the future of human evolution. Primates 59:1–3 https://doi.org/10.1007/s10329-017-0639-2.

Matsuzawa T (2017) Horse cognition and behavior from the perspective of primatology. Primate 58: 473–477.

Matsuzawa T (2017) Monkeys and mountains in Yunnan, China. Primates 58:379–383.

Matsuzawa T (2017) The 40th anniversary of the Ai Project: the commemorative gift is a silk scarf painted by Ai the chimpanzee. Primates 58:261–265.

Mendonça RS, Kanamori T, Kuze N, Hayashi M, Bernard H, Matsuzawa T (2017) Development and behavior of wild infant-juvenile East Bornean orangutans (*Pongo pygmaeus morio*) in Danum Valley. Primates 58:211–224.

Mori S, Prokhorov Y (in press) Threefold Extremal Contractions of Types (IIA). II. Proceedings for Nigel's conference Hitchin 70.

Nakamiya M, Mizumura Y, Ono A, Tsujihiro S, Asai A, Isobe H, Shibata K, Doi T (2017), Developing and Conducting a Science Education Program on Human Space Activities, International Astronautical Congress (IAC), IAC-17, E1,3,4,x38672.

中宮賢樹, 水村好貴, 辻廣智子, 土井隆雄 (2017) 「有人宇宙活動のための総合教育プログラムの開発と実践」について. 宇宙科学技術連合講演会. 1J04.

Namiki T, Tsuda I (2017) Mathematical Structures in the Brain Dynamics of Epilepsy. Advances in Neuroinformatics, 10.14931/aini2017.osiv.4.

Okumiya K, Sakamoto R, Kimura Y, Ishikawa M, Fujisawa M, Wada T, Ge Ri-LI, Norboo T, Otsuka K, Matsubayashi K (2018) Glucose Intolerance by Interaction between Hypoxia Adaptation and Lifestyle Change in Highlanders in Tibetan Plateau. Himalayan Study Monographs No19. 37-48.

- Ringhofer M, Inoue S, Mendonça RS, Pereira C, Matsuzawa T, Hirata S, Yamamoto S (2017) Comparison of the social systems of primates and feral horses: data from a newly established horse research site on Serra D'Arga, northern Portugal. *Primates* 58: 479–484.
- Ruslin F, Azmi MA, Matsuda I, Amir R, Md-Zain BM (2017) Monkey school : Training phases for coconut-picking macaques (*Macaca nemestrina*). *Nature Journal* 69: 301-306.
- Sakai T, Mikami A, Suzuki J, Miyabe-Nishiwaki T, Matsui M, Tomonaga M, Hamada Y, Matsuzawa T, Okano H, Oishi K (2017) Developmental trajectory of the corpus callosum from infancy to the juvenile stage: Comparative MRI between chimpanzees and humans. *PLoS ONE*, 12(6): e0179624.
- Sakamoto R, Okumiya K, Norboo T, Tsiring N, Yamaguchi T, Nose M, Takeda S, Tsukihara T, Ishikawa M, Nakajima S, Wada T, Fujisawa M, Imai H, Ishimoto Y, Kimura Y, Fukutomi E, Chen W, Otsuka K, Matsubayashi K (2017) Sleep quality among elderly high-altitude dwellers in Ladakh, *Psychiatry Res.* 2017. Mar;249:51-57. doi: 10.1016/j.psychres.2016.12.043. Epub 2016 Dec 29.
- Satake S, Shimada H, Yamada M, Kim H, Yoshida H, Gondo Y, Matsubayashi K, Matsushita E, Kuzuya M, Kozaki K, Sugimoto K, Senda K, Sakuma M, Endo N, Arai H (2017) Prevalence of frailty among community-dwellers and outpatients in Japan as defined by the Japanese version of the Cardiovascular Health Study criteria, *Geriatr Gerontol Int.* 2017 Dec;17(12):2629-2634. doi: 10.1111/ggi.13129.
- Sawano T, Yamamoto H (in press) Substrate-Directed Catalytic Selective Chemical Reactions. *Journal of Organic Chemistry*.
- Tatsumoto S, Go Y, Fukuta K, Noguchi H, Hayakawa T, Tomonaga M, Hirai H, Matsuzawa T, Agata K, Fujiyama A (2017) Direct estimation of de novo mutation rates in a chimpanzee parent-offspring trio by ultra-deep whole genome sequencing. *Scientific Reports* 7:13561.
- Tsuchida S, Murata K, Ohkuma M, Ushida K (2017) Isolation of *Streptococcus galloyticus* with very high degradability of condensed tannins from feces of the wild Japanese rock ptarmigans on Mt. Tateyama. *Journal of General and Applied Microbiology* 63: 195-198.
- Tsuchida S, Ohara Y, Kuramochi K, Murata K, Ushida K (2017) Effective degradation of phenolic glycoside rhododendrin and its aglycone rhododendrol by cecal feces of wild Japanese rock ptarmigans. *Japanese Journal of Zoo and Wildlife Medicine* 22: 41-45.

- Tsuchida S, Maruyama F, Ogura Y, Hayashi T, Toyoda A, Ohkuma M, Ushida K (2017) Genomic characteristics of *Bifidobacterium thermacidophilum* pig isolates and wild boar isolates reveal the unique presence of a putative mobile genetic element with tetW for pig farm isolates. *Frontiers Microbiology* doi: 10.3389/fmicb.2017.01540.
- Tsuda I (2018) Finding mathematics in dynamics of the brain: Walter Freeman as an outstanding applied mathematician. *Journal of Consciousness Studies*, 25: 121-130.
- Tsuda I (2017) Computational theory for constrained self-organization in neural systems and its applications. *Advances in Neuroinformatics*, 10.14931/aini2017.kl.3.
- 辻本雅史 (2017) 国際日本研究の可能性、『アリーナ』第20号、pp.498-504、中部大学編。
- 牛田一成 (2017) 飼育動物と野生動物の薬剤耐性菌と有用菌分離.家畜感染症学会誌 6: 29-36.
- 牛田一成, 土田さやか (2017) 腸内細菌研究のもう一つのフロンティア「野生動物の腸内細菌」. 太陽化学メールマガジン.
http://www.taiyokagaku.com/tomorrow_solution/backnumber/20171203.html.
- Yamaguchi K (preprint) G_2 Geometry in Contact Geometry of Second Order.
- Yano M, Komatsubara T (forthcoming) Price competition or price leadership. *Economic Theory*, DOI: 10.1007/s00199-017-1080-x.
- Yano M (2018) Overcoming Silos and Kakines, RIETI Highlight, 2018 Special Edition, Vol.68, 18-20.
- 矢野誠 (2017) 市場の質の法と経済学, ファイナンス, 2017年5月号, Vol.53, No.2, pp.60-67.
- 矢野誠 (2018) 実践的経済学研究のすすめ, 経済セミナー増刊『経済学者が贈る未来への羅針盤』, pp.20-24.
- Yodo M, Yano M (2017) Household income and the OECD's four types of social capital, RIETI Discussion Paper Series, 17-E-119.

(3) 学会発表・招待講演

- Arai Z (2017) The Conley index for real and complex Henon maps. 力学系-理論と応用の連携探索. 京都大学数理解析研究所, 京都.
- Arai Z (2017) The Conley index for real and complex Henon maps. 京都力学系セミナー. 京都大学, 京都.
- Arai Z (2017) On the computation of the monodromy of the Henon map and its applications. Foundations of Computational Mathematics. University of Barcelona, Barcelona, Spain.

- 荒井迅 (2017) 力学系の大域的計算の困難について. 岐阜数理科学セミナー. 岐阜大学, 岐阜.
- 荒井迅 (2017) 複素からみた分岐理論. Interaction between Pure and Applied Mathematics 2017. 明治大学, 東京.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙をめざせ」中部大学 中部大学天文台開所式記念講演会.
- 土井隆雄 (2017) 「日本の有人宇宙活動」大阪市立大学 大阪市立大学特別講演会.
- 土井隆雄 (2017) 「日本の有人宇宙活動」日本モンキーセンター 京大モンキー キャンパス.
- 土井隆雄 (2017) 「未知への飛翔 - 宇宙はすぐそこに」大同大学 大同大学講演会.
- 土井隆雄 (2017) 「日本の有人宇宙活動」国立天文台岡山天体物理観測所 第18回国立天文台岡山天体物理観測所観測協力連絡会議.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙をめざせ - 日本の有人宇宙活動」長崎県新上五島町 小惑星「新上五島」命名記念土井隆雄宇宙飛行士講演会.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙をめざせ - 有人宇宙活動」京都大学 地球電磁気・地球惑星圏学会「京都で体験！キミの知らない宇宙と地球の物語」.
- 土井隆雄 (2017) 「日本の有人宇宙活動」京都大学 生存圏フォーラム.
- 土井隆雄 (2017) 「日本の有人宇宙活動」京都大学 京大春秋講座.
- 土井隆雄 (2017) 「日本の有人宇宙活動」キャンパスプラザ京都 金曜天文講話 第18回.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙への夢～新たなる挑戦」宮崎県宮崎市 宮崎県教職員互助会 平成29年度文化講演会.
- 土井隆雄 (2017) 「有人宇宙学の創出」京都大学 京都大学11月祭.
- 土井隆雄 (2017) "A Science Education Program on Human Space Activities", International Academy of Astronautics, Shinsen, China 21st IAA Human in Space.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙と地球環境」広島環境保健協会、広島市 広島県環境保健協会 創立60周年記念式典.
- 土井隆雄 (2017) 「有人宇宙活動-有人宇宙学の創出」日本航空宇宙学会, 大阪市ライド祭 2017.
- 土井隆雄 (2018) 「宇宙への夢～新たなる挑戦」株式会社三菱鉛筆、東京 三菱鉛筆講演会.
- 土井隆雄 (2018) 「有人宇宙学の目指すもの」JAXA 宇宙科学研究所 宇宙環境利用シンポジウム.
- 土井隆雄 (2018) 「日本の有人宇宙活動」東京理科大学 宇宙教育プログラム閉校式.

福井弘道 (2017) 「The Science of Where」 第13回 GIS コミュニティフォーラム, ESRI ジャパンユーザ会, 東京ミッドタウン, 東京.

福井弘道 (2017)「Digital Earh/GIS でつくるナレッジハブ」G 空間セミナー2018 in GIFU, (財) 岐阜県建設研究センター主催, ソフトピアセンタービル, 岐阜県大垣市.

Fukui H (2017) Proposal for ISDE Japan Chapter, International Society for Digital Earth Council Meeting, Sydney.

Fukui H (2017) The Digital Earth Era and Unmanned Aircraft System (UAS) — GIS Platform for Disaster Management and Response The 2nd Annual Meeting and Workshop of the e-ASIA Program, Development of Information Gathering and Utilization System Using Small UAVs for Disaster Risk Assessment, Monitoring and Response, PHIVOLCS, Philippines.

Fukui H (2017) GIS and Digital Earth Technologies for Early Warning System---Towards Resilient and Sustainable Society in Pacific, The 1st Expert Group Meeting: Pacific Strategy for Knowledge Hub on Early Warning System - with special emphasis on use of spatial data by the Pacific Island countries, Nadi, Fiji.

Fukui H (2017) Digital Earth as an Information Platform for SDGs and FUTURE EARTH –Use Case for SOCIETY 5.0, The International Conference InterCarto/InterGIS–23 Geoinformation support of sustainable development of territories in the context of global climate change, in Yuzhno-Sakhalinsk (Sakhalin region, Russia).

Fukui H (2017) Statistical Geospatial Indicators for Disaster-related SDGs from Digital Earth Perspective---Towards Resilient and Sustainable Society, The 5th Session of Committee on Disaster Risk Reduction EXPERT GROUP MEETING (Side Event), Statistical Geospatial Indicators on Disaster-related SDG Implementation, UN-ESCAP Bangkok.

Fukui H (2017) Findings and Recommendations for Early Warning System for PICs--Towards Resilient and Sustainable Society in Pacific, The 2nd Expert Group Meeting: Pacific Strategy for Knowledge Hub on Early Warning System - Tropical Cyclone Early Warning System and Information Flow in the Pacific, Jakarta.

Fukui H (2017) Integration of UAS to Disaster Management System - Digital Earth Platform for Disaster Management and Response The 3rd Annual Meeting and Workshop of the e-ASIA Program, Development of Information Gathering and Utilization System Using Small UAVs for Disaster Risk Assessment, Monitoring

and Response, VNU, Vietnam.

Fukui H (2017) Statistical Geospatial Indicators for Disaster-related SDGs from Digital Earth Perspective, Jeju Expert Group Meeting of ESCAP, Statistical Geospatial Indicators for Disaster-related SDGs, Jeju.

Fukui H (2017) Statistical Geospatial Indicators for Disaster-related SDGs from Digital Earth Perspective - Towards Resilient and Sustainable Society, Almaty Expert Group Meeting of ESCAP, Statistical Geospatial Indicators for Disaster-related SDGs, Almaty Kazakhstan.

福井弘道 (2017) 中部大学の最近のデジタルアースの取り組み, 2017 秋季 CV ビジネス研究会, 松山.

福井弘道 (2017) 大規模災害対策の現状と課題 一国難に備えるにはー, 中部大学—愛知学院大学 大学連携協定締結記念シンポジウム, 愛知学院名城キャンパス.

福井弘道 (2017) デジタルアース研究と Society 5.0, G 空間ほっとセミナー 日本測量協会, 名古屋.

福井弘道 (2017) 春日井市と名古屋市への防災ドローン導入支援に向けて, みえ防災・減災センター「ドローン研究会」三重大学.

福井弘道 (2017) 最先端, 最強の災害対応を目指した名古屋市危機管理センターの構築, 名古屋市防災図上訓練, 名古屋市役所.

福井弘道 (2017) 「気候変動・地球の変化を可視化する」 - デジタルアースの取り組み, 第 13 回気象サイエンスカフェ, 名古屋市科学館東館キーズカフェ.

福井弘道 (2017) 人が地球を変える力を持った時代「人新世」を考える～フロン問題を教訓として～, フロン対策から「世界空気の日を考える」リレーセミナーin 富山県, 一般社団法人環境創造研究センター, 高岡市 雲龍山勝興寺本堂.

福井弘道 (2017) 人が地球を変える力を持った時代「人新世」を考える～フロン問題を教訓として～, フロン対策から「世界空気の日を考える」リレーセミナーin 長野県, 一般社団法人環境創造研究センター, 飯田市役所.

福井弘道 (2017) 人が地球を変える力を持った時代「人新世」を考える～フロン問題を教訓として～, フロン対策から「世界空気の日を考える」リレーセミナーin 福井県, 一般社団法人環境創造研究センター, 福井県国際交流会館.

福井弘道 (2017) (IAIA16 現地実行委員会代表) 環境共生学会 環境共生功劳賞 受賞.

小林篤、土田さやか、長谷川雅美、村田浩一、中村浩志、牛田一成 (2018) ライチョウの雛はなぜ母親の盲腸糞を食べるのかーその適応的意義と保全への応用ー日本生態学会第 65 回大会 F01-06.

- 長谷川寿一 (2017) 「日本における人間行動進化学研究の歩み」2016年白眉年次報告会「人はなぜ進化に惹かれるのか」, 京都大学.
- 長谷川寿一 (2017) 「人間行動進化学の視点から」日本グループダイナミクス学会第 64 回大会シンポジウム「社会心理学の意義を語る：知としての価値、そして公共性」, 東京大学.
- 長谷川寿一 (2017) 「ヒトはどのように特別なチンパンジーになったのか？」東京大学こころの多様性と適応の総合的研究機構 2017 年シンポジウム.
- 長谷川寿一 (2017) 「SAGA と GAIN：立上げの頃」第 20 回アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い(SAGA)シンポジウム「これまでの 20 年とこれからの 20 年」, 日本モンキーセンター.
- 長谷川寿一 (2017) 「我々は何者か、どこから来たのか—ヒトはどのように特別なチンパンジーなのかー」, 川崎市民アカデミー.
- 長谷川寿一 (2017) 「共感を科学する：その進化・神経基盤」, 軽井沢土曜懇話会, 国立情報学研究所.
- 長谷川寿一 (2017) 「動物とヒトの間～駒場での 30 年」長谷川寿一教授最終講義, 東京大学.Kohshima S, Yoshimura Y, Takeuchi N, Segawa T, Uetake J (2018) Glacier ecosystems and the glaciological importance of glacier microorganisms, keynote speech for the International Symposium on Cryosphere and Biosphere, International Glaciological Society, Kyoto Japan, March 14-19.
- 幸島司郎 (2017) 野生動物のねむりと時間, 第 24 回日本時間生物学会学術大会特別講演, 京都大学.
- 幸島司郎 (2017) ヒマラヤ、アマゾン、動物園・水族館での研究から, 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンスコロキアム, 東京外国语大学.
- 幸島司郎 (2017) 世界の野生動物をフィールドワークする, 東海高等学校.
- 幸島司郎 (2017) 地球はどこでも研究室, 第二回 MACS コロキウム, 京都大学理学部.
- 松林公蔵 (2017) Holistic Approach towards Ageing Study- Asian Perspective, WHO Ageing Conference in Geneva.
- 松林公蔵 (2017) 東南アジアとは何か?-日本の歴史をふまえて, 高知近森病院学術懇話会.
- 松林公蔵 (2017) Glucose Intolerance by Interaction between Hypoxia Adaptation and Lifestyle Change in Highlanders in Tibetan Plateau. The 4th International Symposium of Asian and Pacific Association of Mountain Medicine.
- 松林公蔵 (2017) 超高齢者会における医・歯・薬の分業と協働—地域フィールド医学の現場から, 岸和田三師会.

- 松林公蔵 (2017) ものを見るということ一脳のプリンシブル. 高知近森病院学術懇話会.
- 松林公蔵 (2017) 芸術や文学が生き生きと描く神経症状. 高知近森病院学術懇話会.
- 松林公蔵 (2017) ものを見るということ一心理学的多様性. 高知近森病院学術懇話会.
- 松林公蔵 (2017) 老いとは何か?-フィールド医学の現場から. 留萌市民公開講座.
- 松林公蔵 (2017) 人類の進化と老化. 高知近森病院学術懇話会.
- 松林公蔵 (2017) 高所医学の歴史と実践. 日本登山医学会, 特別レクチャー.
- 松林公蔵 (2017) Powers of Ten I (Space) 高知近森病院学術懇話会.
- 松林公蔵 (2017) Powers of Ten I (Time) 高知近森病院学術懇話会.
- 松林公蔵 (2017) 現代の中東イスラム問題と日本を考える一歴史的観点から, 高知近森病院学術懇話会.
- 松田一希 (2017) コロブス類の消化のはなし～テングザルの反すうなどを例に～. よこはま動物園ズーラシア定期研究会. よこはま動物園, 横浜市.
- Matsuda I, Tuuga A, Nathan S, Stark D, Goossens B, Ramirez D, Abram NK (2017) Following the Trail of the Elusive Proboscis Monkey in Borneo. The 6th International Seminar on Biodiversity and Evolution - Wildlife Science by New Biologging Studies -. Kyoto University, Kyoto.
- 松田一希 (2017) 霊長類の新常識:個性的なテングザルを追って. 2017年度 京大モンキーキャンパス. 日本モンキーセンター, 犬山市.
- 松田一希 (2017) 謎のテングザルを追ってジャングルへ: フィールド研究の可能性. 福井県立大学海洋生態環境学特別講義. 福井県立大学小浜キャンパス, 小浜市.
- 松田一希、早川卓志、澤田晶子, Nathan SKSS、Saldivar DAR、Goossens B、Stark DJ, Tuuga A (2017) テングザルの前胃内微生物叢の種内変異. 第33回日本靈長類学会大会. コラッセふくしま, 福島市.
- 松田一希 (2017) テングザルの不思議: フィールドからの発見. 岐阜県立関高等学校 スーパーグローバルハイスクールセミナー. 岐阜県立関高校, 関市.
- Matsuda I (2017) Proboscis monkeys - the big noses and stomachs of Borneo. Ecology & Evolution Summer School. Sun Yat-sen University, Guangzhou (China).
- Matsuda I (2017) Connection between Wild and Captivity: a case study of endangered proboscis monkeys. The 6th International Workshop on Tropical Biodiversity Conservation focusing on Large Animal Studies. Department of Biology, FMIPA IPB, Bogor (Indonesia).

- 松田一希 (2017) 動物園をフィールドの窓に—野外研究との連携例. SAGA20(第20回アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い. 日本モンキーセンター, 犬山市.
- 松田一希 (2017) テングザル：1種類のサル研究から世界とつながる. 中部大学創発学術院一周年記念シンポジウム. 中部大学不言実行館, 春日井市.
- 松田一希 (2017) テングザルの秘密—不思議な鼻、お腹、群れ社会の謎にせまる. 中部大学市民講座. 豊明市南部公民館, 豊明市.
- 松田一希 (2018) 靈長類の社会創発現象の解明に向けて：個体・集団のインタラクションの観察. 「脳領域／個体／集団間のインタラクション創発原理の解明と適用」 キックオフシンポジウム. 銀座松竹スクエア, 東京.
- Matsuzawa T (2017) Imagination: Human Mind Learned from the Study of Chimpanzees. Kunming Institute of Zoology, Kunming, China.
- Matsuzawa T (2017) Human mind viewed from the study of chimpanzees. Evolution of the brain. Fondation Ipsen, Paris, France.
- Matsuzawa T (2017) 昆明理工大学, Kunming, China.
- Matsuzawa T (2017) Conférence Lusophonie et biodiversité. Musée de l'Homme, Paris, France.
- Matsuzawa T (2017) 想像的力量 Shanghai Natural History Museum, Shanghai, China.
- Matsuzawa T (2017) Primatology to Wildlife science: The fieldwork promotes the conservation and enrichment of wild endangered animals. Guangzhou Zoo, Guangzhou, China.
- Matsuzawa T (2017) 想像的力量：人間性の進化を考える. 第32届中日工程技术研討會人文科技組一身處地球環境危機的時代再省生與死.
- Matsuzawa T (2017) L'origine della mente nel confronto fra esseri umani e scimpanz? Associazione Festival della Scienza. At Palazzo Ducale, Genoa, Italy.
- Matsuzawa T (2017) Human mind viewed from the study of primate evolution (人間の心を靈長類の進化から考える). 台湾大学心理学科, Taipei, Taiwan.
- Matsuzawa T (2017) La Primatologie japonaise et l'expérience lusophone. Université de la Sorbonne, Paris, France.
- Matsuzawa T (2017) Human evolution viewed from the study of chimpanzees (l'évolution humaine vue de l'étude des chimpanzés). University of Conakry, Conakry, Guinea.
- Matsuzawa T (2017) Nocturne MONKEYS + lecture by Tetsuro Matsuzawa. Museum of Natural Sciences, Brussels, Belgian.
- 松沢哲郎 (2017) 互いを思いやる心の進化. 日本モンキーセンター 第6回友の

会のつどい, 愛知県犬山市.

松沢哲郎 (2017) 「アイプロジェクト」を通して人間特有の想像力や利他性の芽生えを探る—大脳の進化のトレードオフ. かわさき市民アカデミー, 神奈川県川崎市.

松沢哲郎 (2017) 想像するちから チンパンジーが教えてくれた人間の心. 市立砺波総合病院 創立記念講演会, 富山県砺波市.

松沢哲郎 (2017) 「互いに思いやる」心の進化. 第 55 回法然院 夜の森の教室, 京都府京都市.

松沢哲郎 (2017) 公開講演 東北大学医学部良陵同窓会, 宮城県仙台市.

松沢哲郎 (2017) 公開講座 互いを思いやる心の進化. 中部学院大学, 岐阜県関市.

松沢哲郎 (2017) 互いを思いやる心の進化. 核融合科学研究所市民学術講演会, 岐阜県多治見市.

松沢哲郎 (2017) 公開講演 チンパンジー研究からヒューマニズムを考える. ハイデガー・フォーラム 第十二回大会, 京都府京都市.

松沢哲郎 (2017) チンパンジーの描画. 日本描画テスト・描画療法学会第 27 回大会, 愛知県名古屋市.

松沢哲郎 (2017) 言語の進化を考える. 新学術領域研究「共創的コミュニケーションのための言語進化学」領域立ち上げ討論会・公募研究説明会記念講演, 京都府京都市.

松沢哲郎 (2017) 公開講演 知の探検:ぼくがチンパンジーになったわけ. 学生のためのキャリア発見シンポジウム ~先人たちの研究人生解体新書~, 京都府京都市.

松沢哲郎 (2017) 公開講演ジェーン・グドール氏の 2017 年コスモス国際賞受賞記念講演会, 京都府京都市.

松沢哲郎 (2017) 想像する力: チンパンジーの親子が教えてくれたもの. 2017 年度たかつかさ保育園子育て講演会, 京都府京都市.

松沢哲郎 (2017) 公開講座 心の進化を探る. 中部学院大学, 岐阜県各務原市.

松沢哲郎 (2017) 想像するちから: チンパンジーが教えてくれた人間の心. 芸術と科学のハーモニー特別講演会, 愛知県知多郡武豊町.

松沢哲郎 (2017) パラボリックフライトから人間の進化の未来を考える. 第 11 回宇宙ユニットシンポジウム 「人類は宇宙人になれるか?—宇宙教育を通じた挑戦—」, 京都府京都市.

松沢哲郎 (2017) 心の進化を探る: チンパンジーによるチームとリーダーシップ (Looking for the evolutionary origins of human mind: Team and leadership in chimpanzees). 第 48 回日本心臓血管外科学会学術総会特別講演, 三重県津

市。

- Mori S (2017) On the classification of algebraic varieties. Warwick 大学数学談話会, Warwick 大学, コベントリー, 連合王国.
- Mori S (2017) On the classification of algebraic varieties. 75 Years of Mathematics in Mexico. メキシコ国立大学数学研究所, メキシコシティ, メキシコ.
- Mori S (2017) On the classification of algebraic varieties. Kavli IPMU 談話会. 東京大学 Kavli IPMU, 柏市.
- Mori S (2017) Extremal contractions of dimension three with fiber dimension 1. Simons Conference in Mathematics and Physical Sciences (Birational Geometry). サイモンズ財団, New York, 米国.
- Namiki T, Tsuda I (2017) Mathematical Structures in the Brain Dynamics of Epilepsy. Advances in Neuroinformatics. RIKEN, Wako, Saitama.
- 行木孝夫, 田所智, 津田一郎 (2017) Mathematical classification of brain dynamics in epilepsy. 第 51 回日本てんかん学会学術集会. 京都国際会議場, 京都.
- 土田さやか、小林篤、長谷川雅美、村田浩一、中村浩志、牛田一成 (2018) ライチョウにはライチョウの乳酸菌！！日本生態学会第 65 回大会, 札幌.
- 津田一郎 (2017) 拘束条件付き自己組織化理論とその応用. 第 17 回 K フォーラム「今のこれからのロボット・人工知能・脳科学」. ホテルアソシア高山リゾート, 高山.
- 津田一郎 (2018) 拘束条件付き自己組織化理論とその脳科学への応用. TFC Workshop, Emerging Perspective Program「互いに矛盾する分散制御と中枢制御の数理神経科学的融合」. 東北大学知の館, 仙台.
- 津田一郎 (2017) 脳と心のダイナミクス：数学、物理学、情報科学、生物学、認知科学が交差する複雑系科学の視点. 第 1 回応用数学物理コロキウム. 岐阜大学工学部電気電子・情報工学科応用物理コース, 岐阜.
- Tsuda I (2017) Computational theory for constrained self-organization in neural systems and its applications. Advances in Neuroinformatics. RIKEN, Wako, Saitama.
- Tsuda I (2017) Self-organization with constraints: The significance of invariant manifolds. ICCN 2017. Carmona, Seville, Spain.
- Tsuda I (2017) Self-organization with constraints and its application to insight into unstable brain activity. RIMS 共同研究「真に複雑な系における自己組織化の原理の探求」. 京都大学数理解析研究所, 京都.
- Tsuda I (2017) Self-organization with constraints: Hermeneutics with variational model for visual hallucinations in DLB. Forum on Cognitive Neuroscience Frontier. Hangzhou Jinxi Hotel, Hangzhou, China.
- 辻本雅史 (2017) 〈知の伝達メディア〉の射程, 大葉大学, 台中市, 台湾.

- 辻本雅史 (2017) 貝原益軒と石田梅岩—民衆における学の争奪—, (社)心学明成
舎サマーセミナー, 大蓮寺應典院ホール, 大阪市.
- 辻本雅史 (2017) 日本近世の思想と文化, 中国文化大学, 台北市, 台湾.
- 辻本雅史 (2017) 日本近世の思想と文化—メディアの視点から, 国立台湾大学
日本研究センター第37回学術講論会, 台北市, 台湾.
- 辻本雅史 (2017) 日本近世における民心の浮上, 創新国際シンポジウム, 国立
台湾大学日本語文学系, 台北市, 台湾.
- 辻本雅史 (2017) 貝原益軒と教育, 日文研国際シンポジウム「書物にみる絵と
ことばの350年」国際日本文化研究センター, 京都市.
- 辻本雅史 (2018) 子育ての不易と流行, (公益)前川財団・第7回未来教育シ
ンポジウム「親と子のコミュニケーション」, 和敬塾大講堂, 東京.
- 辻本雅史 (2018) 素読の教育文化—江戸の知の作られ方—, 第7回創発セミナー,
中部大学創発学院, 春日井市.
- 辻本雅史 (2018) 入江宏の業績 -1970年代以降を中心に, 日本教育史学会第621
回例会, 立教大学池袋キャンパス, 東京.
- Ushida K (2017) The collaborative research project for drug resistance bacteria in
Uganda animal agriculture and finding the alternatives such as probiotics for drug
use from Ugandan local environment – First year’s results and perspectives. At 6th
International Cultural Boma 2017. Makerere University, Uganda.
- 牛田一成、土田さやか、小林篤、上田敦史、山田拓司、長谷川雅美、村田浩一、
中村浩志 (2018) 野生ニホンライチョウ腸内細菌叢の特徴と地域差. 日本生
態学会第65回大会 J02-01.
- 山口佳三 (2017) 二階の接触幾何学, 第11回早稲田大学数学・応用数理談話会.
- 山口佳三 (2017) B_3 Geometry in Contact Geometry of Second Order, 神戸大学幾
何学研究集会.
- 山口佳三 (2017) G_2 Geometry in Contact Geometry of Second Order, Geometric and
Algebraic Singularity Theory in Bedlewo, Poland.
- 山口佳三 (2017) 3 Lectures in “G_2 Geometry in Contact Geometry of Second Order”,
Simon Semester “Symmetry and Geometric Structures”, Banach Center, Warsaw.
- 山本尚 (2017) 破壊的イノベーションを目指して, 第5回(通算第21回)定時社
員総会 特別講演. ホテルLALシティ田町 地階鳳凰, 東京.
- 山本尚 (2017) デザイン型ルイス酸触媒と破壊的イノベーション, グリーン自然
科学レクチャー(第78回化学系セミナー). 名古屋大学大学院理学研究科物
質理学専攻理学部化学科IB大講義室, 愛知.
- 山本尚 (2017) 破壊的イノベーションと触媒化学・日本の強みと弱みー, 平成29
年度名大応化会. 学士会館(本館), 東京.

- 山本尚 (2017) Lewis Acid Catalyst, 45th National Organic Chemistry Symposium.
University of California, Davis, アメリカ.
- 山本尚 (2017) Substrate Controlled Asymmetric Reactions, 第 29 回不斉に関する国際会議 [29th International Symposium on Chirality (Chirality 2017 ; ISCD-29)] .
早稲田大学国際会議場, 東京.
- 山本尚 (2017) 科学技術インフラストラクチャーの構築と我が国の国際競争力,
日経 BP 総研クリーンテック研究所主催 CTO30 会議第 5 回. 御茶ノ水ソラシティ カンファレンスセンター, 東京.
- 山本尚 (2017) 基質支配の化学反応-Substrate Controlled Chemical Reactions, 沖縄
科学技術大学院大学, 沖縄.
- 山本尚 (2017) Substrate Controlled Asymmetric Reactions, Free University of Berlin,
ドイツ.
- 山本尚 (2017) 破壊的イノベーションとしての触媒化学, あいちサイエンスフェスティバル 2017. 名古屋大学理学南館 坂田・平田ホール, 愛知.
- 山本尚 (2017) 分子が開く破壊的イノベーション, 高分子同友会通常例会 2017
年 10 月例会. 学士会館, 東京.
- 山本尚 (2017) 基質支配の化学反応と触媒的ペプチド合成, 第 11 回日本電磁波
エネルギー応用学会シンポジウム特別講演. WINCAICHI (ウインクあいち)
10F 1001 会議室, 愛知.
- 山本尚 (2017) 民族性と科学技術のジレンマ, 鳥取で開催される日本を代表する
化学者の講演会に参加しよう!. 鳥取産業体育館メインアリーナ, 鳥取.
- 山本尚 (2017) 触媒的ペプチド合成, 第 54 回ペプチド討論会. 大阪府立大学中百
舌鳥キャンパス U ホール白鷺/学術交流会館, 大阪.
- 山本尚 (2017) 分子性酸触媒の開発, 平成 29 年度地域産学官と技術士との合同
セミナー科学分野の革新的モノづくりと産学官連携 一 次世代技術を実現
するための開発から実装まで 一. マザックアートプラザ 4 階会議室, 愛知.
- 山本尚 (2017) Substrate-Controlled Chemical Reaction -Catalytic Peptide Synthesis-,
第 27 回光学活性化合物シンポジウム. 日本薬学会館長井記念ホール, 東京.
- 山本尚 (2018) From Lewis acid catalyst to catalytic peptide synthesis, NANYANG
TECHNOLOGICAL UNIVERSITY, Singapore.
- 山本尚 (2018) ルイス酸から触媒的ペプチド合成へ, 薬科学研究所セミナー. 塩
野義製薬株式会社医薬研究センター, 大阪.
- 山本尚 (2018) 破壊的イノベーションとしての触媒的ペプチド合成, 日本化学会
第 98 春季年会. 日本大学理工学部船橋キャンパス S3 会場, 千葉.
- 山本尚 (2018) 民族性と科学技術のジレンマ, 日本化学会第 98 春季年会. 日本
大学理工学部船橋キャンパス S 1 会場, 千葉.

山本尚 (2018) 新機能創出を目指した分子技術の構築, 一般社団法人日本物理学会第 73 回年次大会. 東京理科大学野田キャンパス, 千葉.

Yano M (2018), Keynote Lecture: High quality markets –a prerequisite for an innovative society, ERIA, IDE-JETRO, Kyoto University, Waseda University Joint International Economic Symposium —Innovation, Strategy, and Survivability for East Asian Firms in the Globalized World—, Higashi-Ichijo-kan, Kyoto University.

Yano M (2018), “From General Equilibrium Theory To Market Quality Economics”, Conference on Institutions, Markets, and Market Quality (IEFS Japan Annual Meeting 2017), Kyoto University.

矢野誠 (2017), パネルディスカッション・パネリスト「エビデンスベース社会の確立」, 京都大学経済研究所シンポジウムシリーズⅡ：豊かさを育むエビデンスベース社会の実現に向けて 第4回 「エビデンスベース社会の確立：文理融合と科学技術コミュニケーションの実現に向けて」(2017.4.25) , 京都大学東京オフィス.

矢野誠 (2017), 社会科学をなぜ学ぶか, 中部大学創発学術院 第2回 学術レクチャー (2017.5.15) , 中部大学.

矢野誠 (2017), 「文理融合を育む人材育成 ー作り手と使い手をつなぐー」, 京都大学経済研究所シンポジウムシリーズⅡ：豊かさを育むエビデンスベース社会の実現に向けて 第5回 「文理融合の発想を育む人材育成～作り手と使い手をつなぐ～」(2017.6.17) , 京都大学国際科学イノベーション棟 シンポジウムホール.

矢野誠 (2017), 米国の税制改革をめぐる動き, RIETI 特別セミナー (2017.8.21) , 経済産業研究所.

矢野誠 (2017), ソーシャル・キャピタルと所得との関係性の実証分析, 京都大学経済研究所共同利用・共同研究拠点 : CAPS 事業, エビデンスベース社会構築事業「ソーシャル・キャピタルと地域社会との関わり」(2017.10.27) , 経済産業研究所.

矢野誠 (2017), 市場の質の法と経済学, 高崎経済大学経済学会第3回学術講演会 (2017.11.8) , 高崎経済大学.

矢野誠 (2017), 明るい未来の構築に向けて一経済学者からのメッセージ, 京都大学経済研究所シンポジウムシリーズⅡ：豊かさを育むエビデンスベース社会の実現に向けて 第7回 「明るい社会の未来像」(2018.3.10) , 京都大学 百周年時計台記念館 百周年記念ホール.

(4) 新聞記事・報道など

- 土井隆雄 (2017) 「地球と水と月の物語」 Ocean News Letter 第 410 号
(2017.09.05 発行)
https://www.spf.org/opri-j/projects/information/newsletter/backnumber/2017/410_1.html.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙の深淵を見つめて」 モンキー2巻3号.
- 土井隆雄 (2017) 「有人宇宙学の創出と教育的実践」 遊星人 vol.26_4号.
- 土井隆雄 (2017) 「ソフィアからきみへ」 京都新聞 2017/5/16.
- 土井隆雄 (2017) 「無重力で人は何を思う？ 京大が実験、土井飛行士も参加」 京都新聞 2017/7/26.
- 土井隆雄 (2017) 「系外惑星観測」 日経新聞 2017/9/4.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙の閉鎖環境体感」 朝日新聞デジタル 2017/9/11.
- 土井隆雄 (2017) 「京大で宇宙飛行士の実習 土井教授ら講義、微小重力実験も」 京都新聞 2017/9/11.
- 土井隆雄 (2017) 「京都大花山天文台で合宿実習スタート 体で感じ宇宙を学ぼう」 産経新聞 2017/9/11.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙の閉鎖環境 体感」 朝日新聞 2017/9/13.
- 土井隆雄 (2017) 「生命との関わり 若者と探求」
<https://mainichi.jp/articles/20170930/ddm/005/070/020000c> 毎日新聞 2017/9/30.
- 土井隆雄 (2017) 「ふわっと無重力で心変化？ 京大、土井さんらが実証実験」 共同通信 2017/10/28.
- 土井隆雄 (2017) 「宇宙をめざせ！」 静岡新聞 2017/11/24.
- 土井隆雄 (2018) 「今なぜ月を目指すのか 他の惑星到達への足がかり」 読売新聞論点スペシャル 2018/1/17.
- 土井隆雄 (2018) 「土井さん教え子宇宙へ一步 京大・中里さん航空会社就職ハイロット候補に」 読売新聞 2018/3/24.
- 郷康広, 藤山秋佐夫, 阿形清和, 松沢哲郎 (2018) チンパンジー親子トリオのゲノム解析 (ちびっこチンパンジーと仲間たち 第194回) 科学 88: 122–123.
- 平田聰, リングホーファー萌奈美, 井上漱太, レナータ・メンドンサ, カルロス・ペレイラ, 松沢哲郎, 山本真也 (2017) 野生ウマの社会：靈長類との比較から (ちびっこチンパンジーと仲間たち 第189回) 科学 87: 826–827.
- 松田一希 (2018) 「先端人」 朝日新聞. 2月 4 日.
- 松田一希 (2018) 「大きな鼻ほど強くてモテる、テングザルで判明」 Web ナショジオ. 2月 22 日.
- 松田一希 (2018) 「For This Monkey, a Bigger Nose Means a Better Sex Life」 National Geographic USA. 2月 22 日.

- 松田一希 (2018) 「Study: Proboscis monkeys evolved bigger noses to get more females」 The Asahi Shimbun. 2月 22 日.
- 松田一希 (2018) 「テングザル、鼻が大きい鼻が「男前」」 朝日新聞. 2月 22 日.
- 松田一希 (2018) 「テングザル、鼻が大きいと「男前」」 朝日小学生新聞. 2月 23 日.
- 松田一希 (2018) 「テングザル 大きな鼻、男らしさの証し？ 体格良く 繁殖 能力も高く」 毎日新聞. 2月 28 日.
- 松田一希 (2018) 「大きな鼻は男らしさの証し」 京都新聞. 3月 9 日.
- 松田一希 (2018) 「大きな鼻は男らしさの証し」 佐賀新聞 2月 22 日.
- 松田一希 (2018) 「鼻大きいほど繁殖能力高く テングザル、京大など調査」 日経新聞. 2月 26 日.
- 松田一希 (2018) 「大きな鼻は男らしさの証し テングザル調査、京大」 共同通信. 2月 22 日.
- 松田一希 (2018) 「大きな鼻ほど強くアピール=雄テングザル、雌に」 時事通信. 2月 22 日.
- 松田一希 (2018) 「大きな鼻は男らしさの証し」 福井新聞. 2月 22 日.
- 松田一希 (2018) 「大きな鼻は男らしさの証し」 東京新聞. 2月 22 日.
- 松沢哲郎 (2018) 「バルブの日特別対談」 日刊工業新聞 3月 20 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「スコットランドの山」道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 04月 23 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「雲南の山とキンシコウ」 道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 5月 28 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「ポルトガルの野生馬」 道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 7月 2 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「アイ・プロジェクト40年」道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 8月 6 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「西安の兵馬俑に思う」 道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 9月 10 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「白神山地のニホンザル」 道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 10月 15 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「そして月に行く」 道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 11月 19 日.
- 松沢哲郎 (2017) 「ブータンの国民総幸福」 道標 ふるさと伝言, 愛媛新聞 12月 24 日.
- 松沢哲郎, ク里斯・マーチン, ドラ・ビロ (2017) チンパンジーが協力して課題解決:2人で数字を順番に答える(ちびっこチンパンジーと仲間たち 第192回) 科学 87: 1114–1115.

- 松沢哲郎 (2018) ジェーン・グドールのコスモス賞 2017 受賞 (ちびっこチンパンジーと仲間たち 第 193 回) 科学 88: 36–37.
- 松沢哲郎 (2018) ブータンの国民総幸福量—ブータン王女来学によせて—ヒマラヤ学誌 No.19, 2.
- 松沢哲郎 おしごとはくぶつかん情報館：その道のプロに聞く わたしのしごと道第 2 回 <https://www.oshihaku.jp/series/00004/002>.
- 松沢哲郎 てがきびと：人生の俯瞰図を描く人
<http://www.kokuyo.co.jp/creative/tegakibito/matsuzawatetsurou/>.
- 松沢哲郎 ラジオ講座 NHK シリーズ こころをよむ「心の進化をさぐる—はじめての霊長類学」2017 年 10 月～12 月.
- 林美里, 熊崎清則, 松沢哲郎, 友永雅己 (2017) プチの最期——チンパンジーの脳死 (ちびっこチンパンジーと仲間たち 第 187 回) 科学 87: 640–641.
- 津田一郎 (2018) 中部大学プレスリリース：数学で脳の連想記憶機構の一端が明らかに—日本人による 30 年以上前の数理モデルを証明. 3 月 27 日.
- 津田一郎 (2018) 「31 年を経て証明に成功—連想記憶の機構の一端を説明する数理モデル、数学的手法を使った検証で正確だと明らかに」 fabcross for エンジニア、MEITEC 社. 3 月 28 日.
- 辻本雅史 (2017) 「「江戸」の学び—「型」の身体化」、『文』第 114 号、公文教育研究会.
- 牛田一成 (2018) NHK 「超体感！エクストリームミッション」番組出演. 3 月 29 日.
- 牛田一成 (2017) 信濃毎日新聞 「母の贈り物で生き抜く」 12 月 8 日.
- 牛田一成 (2017) 每日新聞 「野生ライチョウ 腸に毒素分解の特有細菌 飼育種はなし」 12 月 9 日.
- 矢野誠 (2017), 「専門性と汎用性の両立によりイノベーション生む人材育成」, 日本経済新聞, 2017/8/4.
- 矢野誠 (2017), 「人生の先導役」, 交遊抄, 日本経済新聞, 2017/11/3.
- 矢野誠 (2018), 「明るい未来の構築に向けて—経済学者からのメッセージ」, 日本経済新聞, 2018/3/29.

► IV. 創発学術院の研究教育活動

創発学術院では、専任教員が中心となって研究教育活動の一環として、創発セミナーと学術レクチャーを開催している。創発セミナーは、異なる分野の研究者間の意見交換の場であり、気軽に意見交換ができる、20-30人程度の小規模なセミナーで、隔月で開催している。今年度は3度開催した。また、創発セミナーよりもより専門性が高く、主に学生への講義スタイルを意識した研究教育活動として学術レクチャーを1度開催した。さらに本年度からは、中部大学の学内運営に関する講演会を、第4の催し物として学長コロキウムと名付け1度開催した。

1. 創発セミナー

第6回 創発セミナー

日時：2017年9月21日（木）15時30分～17時30分

会場：創発学術院（16号館10階）

講師：牛田一成（京都府立大学教授、中部大学創発学術院客員教授）
土田さやか（京都府立大学特任講師）

タイトル：腸内細菌研究の歴史と展望（牛田）、実践：アフリカ熱帯林から雪山まで（土田）（参加者数37名）



第7回 創発セミナー

日時：2018年1月24日（水）15時30分～17時30分

会場：創発学術院（16号館10階）

講師：辻本雅史（中部大学副学長、国際センター長）

タイトル：素読の教育文化：江戸の知の作られ方（参加者数44名）



第8回 創発セミナー

日時：2018年3月7日（水）15：30～17：00

会場：創発学術院（16号館10階）

講師：湯本貴和（京都大学靈長類研究所教授）

幸島司郎（京都大学野生動物研究センター教授、中部大学創発学術院客員教授）

タイトル：靈長類学から熱帯林を考える（湯本）、動物行動学から野生動物保全を考える（幸島）（参加者数34名）



2. 学術レクチャー

第2回 学術レクチャー

日時：2017年5月15日（月）15：30～17：30

会場：経営情報学部 2122 講義室

講師：矢野誠 教授（京都大学経済研究所教授、独立行政法人経済産業研究所所長、創発学術院 客員教授）

タイトル：社会科学をなぜ学ぶか（参加者数 27名）



3. 学長コロキウム

第1回 学長コロキウム

日時：2017年7月26日（水）15：30～17：30

会場：創発学術院（16号館10階）

講師：長田義仁（中部大学顧問、理化学研究所客員主管研究員）

タイトル：WPI プログラムのねらいと我が国基礎研究の課題

要旨

我が国の研究水準の低下が叫ばれて久しい。6月17日付日経紙はトップ10%の論文数シェア（2012～2014年平均）は5%でスペインやオーストラリアに後れを取って世界第10位と報じた。研究費の減少が原因と言われているが、欧米では違った見方をしている。文化の閉鎖性にあるという。我が国の研究活動の凋落を防ぐ期待も抱いて、世界トップ研究拠点形成(WPI)プログラムは2007年に5拠点でスタートした。各拠点に毎年14億円の予算配分、10年継続というかつてない大型予算が組まれたこのプログラムは本年3月をもって第1期が終了した。果たしてどのような成果が得られたのか、見えてきた課題はあったのか？本報告ではWPIプログラムのねらいと内容を紹介しつつ、我が国のおかれた基礎研究の課題などについても議論したい（参加者数25名）。

学長コロキウム

第1回

主催：中部大学
共催：創発学術院

**WPIプログラムのねらいと
我が国基礎研究の課題**

日程 7月26日（水）

時間 15時00分～17時00分

場所 創発学術院（16号館10階）

講師 長田 義仁

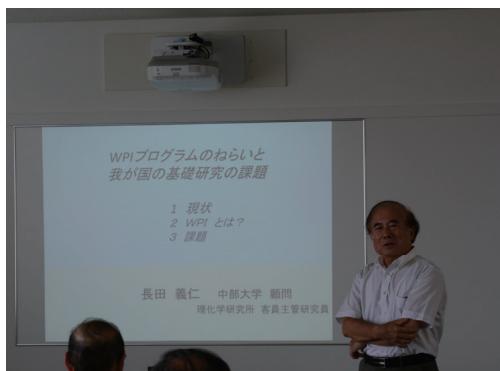
中部大学 顧問
理化学研究所 客員主管研究員

我が国の研究水準の低下が叫ばれて久しい。6月17日付日経紙はトップ10%の論文数シェア（2012～2014年平均）は5%でスペインやオーストラリアに後れを取って世界第10位と報じた。研究費の減少が原因と言われているが、欧米では違った見方をしている。文化の閉鎖性にあるという。

我が国の研究活動の凋落を防ぐ期待も抱いて、世界トップ研究拠点形成(WPI)プログラムは2007年に5拠点でスタートした。各拠点に毎年14億円の予算配分、10年継続というかつてない大型予算が組まれたこのプログラムは本年3月をもって第1期が終了した。果たしてどのような成果が得られたのか、見えてきた課題はあったのか？本報告ではWPIプログラムのねらいと内容を紹介しつつ、我が国のおかれた基礎研究の課題などについても議論したい。

お問い合わせ先：創発学術院
MAIL : sohatsu@office.chubu.ac.jp
TEL : 0568-51-9520 (内線8825)

中部大学
創発学術院
CUAES





V. 社会貢献

1. 創発シンポジウム

創発学術院では、学内外に対する「目に見える」社会貢献として、「創発シンポジウム」を開催している。大規模なものであり、メディア等にも広く周知し、中部大学の学部生をはじめ、教職員や中高生、さらには一般の方々への参加を呼びかけている。今年度は創発シンポジウムを1度開催した。また今年度より、主に高校生を対象として、創発学術院の教員を中心に数学の面白さや楽しさを実感してもらうための催し物として「数学キャラバン」を開始した。

(1) 創発学術院開所1周年記念シンポジウム

日時：2017年11月28日（火）14:00～17:30

会場：不言実行館1階 アクティブルホール（参加者数186名）

| | | | | | | |
|------|--|-------------------------------|-------------------|-------------|---|--|
| <1部> | 14:00～15:05 | 14:05～14:10 | 14:10～14:25 | 14:25～15:05 | 14:00～14:05 | 創発学術院院長あいさつ 来賓挨拶（春日井市長） 創発学術院紹介（松沢哲郎創発学術院特別招聘教授） 講演 山本尚総合工学研究所長・教授 「民族性と科学技術のジレンマ」 |
| <2部> | 15:20～17:30 | 15:20～15:40 | 15:40～16:00 | 16:00～16:15 | 16:15～16:30 | 16:30～16:50 |
| | 講演 津田一郎創発学術院教授 「創発による人工知能をめざして」 | 講演 荒井迅創発学術院教授 「『次元』の低いはなし」 | 講評 森重文創発学術院特別招聘教授 | 休憩 | 講演 牛田一成創発学術院教授 「腸内細菌研究のフロンティア—野生動物の腸内細菌」 | |
| | 16:50～17:10 | 17:10～17:25 | 17:25～17:30 | 17:25～17:30 | 17:25～17:30 | 17:25～17:30 |
| | 講演 松田一希創発学術院准教授 「テンゲザル：1種類のサル研究から世界とつながる」 | 講評 松沢哲郎創発学術院特別招聘教授 | 中部大学長あいさつ | | | |



(2) 第20回JST数学キャラバン 拡がりゆく数学 in 春日井

日時：2017年7月1日（土）13:40～17:50

会場：22号館1階2215講義室（参加者数117名）

13:10～13:40 受付

13:40～13:50 開会、挨拶

13:50～14:40 長山 雅晴（北海道大学電子科学研究所教授・JST CREST）
「漸化式を使って数理モデルを作ろう！」

14:50～15:40 荒井 迅（中部大学創発学術院教授）
「解けない問題の数学」

15:50～16:40 津田 一郎（中部大学創発学術院教授）
「非整数次元一測ることを根本から考え直してみよう！」

16:50～17:20 講話：

森 重文（京都大学高等研究院特別教授・中部大学創発学術院特別招聘教授）

山口 佳三（北海道大学名誉教授・中部大学創発学術院客員教授）

17:20～17:50 講演者との懇談会

17:50 閉会

主 催 中部大学創発学術院

共 催 国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）



2. 雑誌モンキーの刊行

創発学術院では、公益財団日本モンキーセンターが発行する雑誌「モンキー」の編集、印刷（中部大学ドキュメントセンター利用）を全面的にサポートした。今年度は2巻1-4号の発行をサポートした。

編集長

伊谷原一（京都大学）

副編集長

友永雅己（京都大学）

編集委員

赤見理恵（日本モンキーセンター）
秋山未来（京都大学）
今井由香（日本モンキーセンター）
江藤彩子（日本モンキーセンター）
川上文人（京都大学）
大渕希郷（京都大学）
木村直人（日本モンキーセンター）
幸島司郎（京都大学）
齋藤亜矢（京都造形大学）
左海陽子（京都大学）
新宅勇太（日本モンキーセンター）
高野智（日本モンキーセンター）
早川卓志（京都大学）
林美里（京都大学）
平口愛子（日本モンキーセンター）
平田加奈子（京都大学）
平田聰（京都大学）
松沢哲郎（京都大学、中部大学）
松田一希（中部大学）
山梨裕美（京都市動物園）
湯本貴和（京都大学）
綿貫宏史朗（日本モンキーセンター）

内容

2巻1号（2017年6月）

巻頭言（湯本貴和）

連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第2回 探検へのあこがれ（山極壽一）

連載「氷河からアマゾンまで」第1回 氷河に虫を探しにゆく（幸島司郎）

連載「自然と芸術」第2回 小豆島の猿団子を詠む（尾池和夫）

連載「大型類人猿探訪」第5回 オランウータンがくらす島（林美里）

連載「サルの住む森」第5回 森を知ること、サルを知ること（松田一希）

連載「ウマ学ことはじめ」第5回 野生ウマの群れの関係（平田聰）

連載「海外生息地研修」第5回 スマトラの森の響き（早川卓志）

連載「環境教育実践」第5回 やんばるの森で生業の痕跡を探る（滝澤玲子）

DNA分析から解き明かすボノボの社会（石塚真太郎）

日本でくらす類人猿たち（綿貫宏史郎）

ドローンが見守る森・動物・ヒト（森村成樹）

公益財団法人日本モンキーセンターご寄附のお願い

価格 300円(税込) ISSN 0026-9794

■2巻1号 ■2017年6月

モンキー

靈長類学からワイルドライフサイエンスへ

協賛 豊田通商株式会社

協力 京都大学 瞬長類研究所 WRC 京都大学
中部大学 創発学術院 野生動物
研究センター 文明哲学研究所

協力 京都大学 瞬長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院
Kyoto University Leading Graduate Program
in Primatology and Wildlife Science

公益財団法人 日本モンキーセンター
JAPAN MONKEY CENTRE



2巻2号(2017年9月)

巻頭言(友永雅己)

連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第3回 挫折から雪山へ(山極壽一)

連載「氷河からアマゾンまで」第2回 イルカの眠りかた(幸島司郎)

連載「自然と芸術」第3回 アイのスカーフ:チンパンジーの描写行動(松沢哲郎)

連載「大型類人猿探訪」第6回 チンパンジーの「死」(林美里)

連載「サルの住む森」第6回 サルとの根くらべ(松田一希)

連載「ウマ学ことはじめ」第6回 繁殖期と出産期(平田聰)

連載「海外生息地研修」第6回 マミラウア自然保護区:野生のウアカリを追って
(武真祈子)

連載「環境教育実践」第6回 ユネスコパークを知っていますか?(木下こづえ)

タイで出会ったオオトカゲたち(大渕希郷)

国際環境エンリッチメント会議@コロンビア(山梨裕美)

「冷血動物」の認知能力~日本モンキーセンターでのリクガメ研究

(アンナ ウィルキソン)

公益財団法人日本モンキーセンターご寄附のお願い

価格 300円(税込) ISSN 0026-9794

■2巻2号 ■2017年9月

モンキー

協賛 豊田通商株式会社 株式会社スズケングループ 三和化学研究所

協力 中部学院大学 京都大学 精長類研究所 WRC 京都大学 野生動物 研究センター

CUAES 中部大学 創発学術院 文明哲学研究所

協力 京都大学 精長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院 Kyoto University Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science

公益財団法人 日本モンキーセンター JAPAN MONKEY CENTRE

2巻3号（2017年12月）

巻頭言（村山美穂）

連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第4回 一人暮らしの知恵（山極壽一）

連載「氷河からアマゾンまで」第3回 白目があるのはヒトだけか？（幸島司郎）

連載「自然と芸術」第4回 宇宙の深遠を見つめて（土井隆雄）

連載「大型類人猿探訪」第7回 ボノボをたずねて三千里（林美里）

連載「サルの住む森」第7回 洪水の森で（松田一希）

連載「ウマ学ことはじめ」第7回 ウマ的好奇心（平田聰）

連載「海外生息地研修」第7回 コロンビアでの生息地研修（藤森唯）

連載「環境教育実践」第7回 SAGA—これまでの20年、これからの20年

（友永雅己）

日本人はどこから来たのか？「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」（海部陽介）

重度の障害のある野生チンパンジーの子の紹介（松本卓也）

じやんけんのルール学習：チンパンジー対子ども（ガオ ジエ）

公益財団法人日本モンキーセンターご寄附のお願い

価格 300円(税込) ISSN 0026-9794

■2巻3号 ■2017年12月

モンキー

靈長類学からワイルドライフサイエンスへ

協賛 豊田通商株式会社 スズケングループ 株式会社三和化学研究所

協力 中部学院大学 京都大学 精長類研究所 WRC 京都大学 野生動物研究センター

協力 CUAES 中部大学 創発学術院 INSTITUTE OF PHILOSOPHY & HUMAN VALUES 文明哲学研究所

協力 京都大学 精長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院 Kyoto University Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science

公益財団法人 日本モンキーセンター JAPAN MONKEY CENTRE



2巻4号（2018年3月）

巻頭言（長谷川寿一）

連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第5回 梁山泊との出会い（山極壽一）

連載「氷河からアマゾンまで」第4回 オランウータンとオオカミの顔（幸島司郎）

連載「自然と芸術」第5回 下北半島の寒立馬（尾池和尾）

連載「大型類人猿探訪」第8回 親子のなりたち：前編（林美里）

連載「サルの住む森」第8回 ゲップの記憶（松田一希）

連載「ウマ学ことはじめ」第8回 アルガ山は幽霊山（平田聰）

連載「海外生息地研修」第8回 ボルネオ生息地研修（石田崇斗）

連載「環境教育実践」第8回 西表島のフィールド実習（松沢哲郎）

連載「霊長類学70周年」第1回 「ボスザル」にみる幸島の過去・現在・未来

（鈴村崇文）

連載「生態学者が往く」第1回 タンザニア・ゴンベの旅（湯本貴和）

イルカのメスの好奇心（榎原香鈴美）

公益財団法人日本モンキーセンターご寄附のお願い

価値 300円(税込) ISSN 0026-9794

■2巻4号 ■2018年3月

モンキー

協賛 豊田通商株式会社 株式会社三和化学研究所

協力 中部学院大学 京都大学 灵長類研究所 WRC 京都大学 野生动物研究センター

CUAES 中部大学 創発学術院 文明哲学研究所

京都大学 灵長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院 Kyoto University Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science

公益財団法人 日本モンキーセンター JAPAN MONKEY CENTRE





VI. 中部大学創発学術院規程

中部大学創発学術院規程

(趣旨)

第1条 この規程は、学校法人中部大学管理運営規則第10条第1項の規定に基づき、中部大学創発学術院（以下「学術院」という。）に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 学術院は、中部大学の特色及び強みを活かして新たな学術の創発を目指した先端萌芽的な研究を推進することを目的とする。

(学術院長)

第3条 学術院に、学術院長を置く。

- 2 学術院長は、学術院を代表し、その業務を総括する。
- 3 学術院長は、理事長が任命する。

(運営委員会)

第4条 学術院に、その運営に関する重要事項を審議するため、学術院運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、総長が定める。

(研究科等の教育への協力)

第5条 学術院は、研究科と協議のうえ、大学院における教育のほか、大学における教育等に協力することができる。

(事務)

第6条 学術院に係る事務は、研究推進事務部の協力を得て、事務室において処理する。

(雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、学術院の組織及び運営に関し必要な事項は、学術院長が定める。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

編集後記

私が創発学術院に着任したのは2016年4月です。唯一の専任教員でした。メインオフィスのある大きな部屋の窓際に、私のデスクが一つだけ置かれた寂しい状態での初出勤。コーディネーターの松沢先生、そして中部大学の事務の方たちの助けを借り、オフィスのカーペットの色、ソファー、棚、デスク、全てを一から揃えていく日々。あれからわずか2年で、専任教員、客員教員、研究員、事務員が集い、研究や運営の議論、時には談笑ができるような開放的な空間ができました。柱となるような大きなプロジェクトも走り出しました。私は創発学術院に鍛えられ、時に置いていかれそうになりながらも成長できた2年間でした。本年報をまとめるにあたり、設立当初の初心を忘れることなく、自身の、そして創発学術院の更なる躍進のため謙虚に、そして大胆に研究活動を進めていきたいと決意を新たにしました。(松田一希)

創発学術院に着任してちょうど一年が過ぎました。小さな部局ではありますが、この年報でもご報告させていただいたように、活発な研究活動が行なわれており、様々な刺激を受ける毎日です。また、個々人の研究活動だけでなく、創発学術院の教員相互での、また中部大学の他部局との研究交流も始まっています。数学と脳科学と靈長類学では使う言葉も異なり、どのように連携してゆけばよいのか想像もつかない状態から手探りでのスタートでした。一年間の試行錯誤を経て、最近ではお互いの「研究にかける思い」がだいぶ伝わるようになって来たと感じています。靈長類と言えば、日本モンキーパークも何度か訪問しました。単に動物園に遊びに行ったというだけですが、靈長類は眺めていて飽きないなあ、という気持は共有できるようになったかも知れません。人間に似てるけど違う存在がこんなにも色々いるという事を単純に嬉しく思いました。ちなみに私のお気に入りはクモザルとアヌビスヒヒです。(荒井迅)

2018年5月28日発行

発行者 中部大学創発学術院

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地 16号館

TEL: 0568-51-9520

<http://www.cuaes.jp/>

編集 松田一希、荒井迅

印刷所 中部大学サービスドキュメントセンター

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地 2号館

TEL: 0568-37-0623

<http://www.chubu.jp/cuservice/print/>

